

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

七月一日(水)

晴。暑き煙し。いよく夏なり。花畠の鉢草の茂れを刈る。
② 植物にたか石黃金虫を駆除す。花畠はミグラジオラス、タリナなど
盛りなり。アセイタウ、カルレイスキートナルタン。ジニアホンホン、蛇の目等、天人
菊、ルコ-草なども咲いてゐる。夜、吉田鉢木のための揮毫を終る。我れ
から上手と思はず。

七月二日(水)

晴。暑し。小菊畠の鉢草を抜く。館内保育室の岩波、龜井、瀬内のみ
既に北山道場にも押送されるので、午後午時より皆屋に入ら。かれら又
おとこ居残り、途中も何等か騒ぎ感動をもたらさぬ。午後は歸り家に
赴くに似てたり又同因士佐が私と何等深き心の活会を企むかつた事
を示す。犯罪者・懲役囚の心理の特殊性は我々の判断を難むるもの
有り。夜、カレントオバサウオードにて宿泊す。眠くてよく寝めた。

七月三日(木)

晴。叶々萎る。② 昨夜風吹き冷氣流れる有り。今朝の露は
昨日の如く張らる。夕方も花畠の鉢草抜きをりふ。内閣の添木館本所
作業部武庫川口海す。山中も強か寒き。格闘にあらず。吾用ヒトマト
を室つたが、けやかに上地をもなすことなし。夜、安乐院五福院
を訪り先して帰る。故ゆれぬ多し。

七月四日(金)

晴。空港で働くてゐる石井正義君が肺病の診断下り医療専門に入院せ
となつた。半年前から咳と元氣で運動をやつてゐたが、一ヶ月前から病状悪化



甚しかった。しかし彼女は肺病でないといいつつも当人も希望的になんでいたのである。田畠は洋装の薫衣で花をさしく作つてみなかで山を中山に抱して花細に保坂すとひつて、余は中山とせんてに学傳に鉛キテリと花細へ搬入だ。石井君は元氣で可つかでも節度してゐる。薫衣を行つてゐる。余は教務課もに立派に~~お~~彼を保坂すと運動をせめたりと思つてゐる。教務課長は面会の豫告を合す。鉛木君と面見よりひき摺毫筋を貰ふ。春風里下橋の間一つ、及川政宗洋机の文字記せし修帳あり。絵は一心痛と見なし般と夫人放れしてゐる。鉛木君は墨跡か漏りり書あり。面見とも大に合ひ。日本的にはよといふことはやけりかやうな伝統の藝術を方に付けてなければなぬのを感ず。元中陸軍の務機団、柴橋行利より来信、たまの中江里吾君、云はる所に東文君在し余の旧友に面会せりと云ふ。後、僕漢附の物の返事をする。

七月三日(火)

晴。暑さ出し。夕刻驟雨あり。池田俊彦君も夏の鉛木君とひづく二二ノ内傳の手附なり。此出候するので紀念の摺毫をして貰つた。約50作の経歌一巻を豪傑判の紙に記す。世のなかでまほろしきと認めゆどきも胸底にあらいくさりとは、といふ歌なり。文字素直なり。余もあれども贈り物をする。鉛婦へ手紙多く。國體書にて裏入を依頼す。池田君に岩波文庫本モ内山洋子著の雨傘を預ませた所とヒテフランスに頒布してゐますね。古本を手に持つてよと云ひ。いじ文部省舊本子のスケルトを僕はせんに大に面白かって読んでゐる。字紙にひき鉛いじり筋や國風歌の記述を好む者多し。(しかし人性の根柢の~~志~~には) にほん語を抱き抱きものに因を限らず有なし。

七月三日(水)

晴。重ね晴れて炎暑。久しうりの休み本山山へ旅しても思つ。故海は予東山園年也此山に宿へてゐるとかから着用の申の帰路男女に旅をしてもらふなどござり由村といふ着用が佛仰方面の話をした。別に奇げべき内容をしつやうか地帶の便習で、駄車かここ十数ほどの馬木を在ざ側にひび居します。左はおのの着用も詮す様なつか、急務で返済、予はヨリ海外旅の一端下さかせて貰つた。池田君へは摺毫は了摺印文ハ、又ゆく墨御云を記"大像モ玄以ナ可見之也"一枚、シーツ半句"飛いて赤山! (めのこ)を仰せ西日本ノ時空地土にありて雲霧の鳴人たらんのニ"一枚と仰川上げ。

七月七日(日)

晴。暑氣甚し、今日は支那の庚午山周年であるので午後秋夜にかけて雨天の予、詩あり、出征兵士武運長久を祈願す。戰雲漠々、世界に殺負拵一、我正家に強志の榮譽され。

七月八日(月)

晴。暑氣強し、ヤ村經一君の手紙書く、仰本の職業は忙いことを勧めず、日暮志塾の篆文研究は職業の用紙に少しだけ可とすべし、生活の大い中にあらじと記す。

七月九日(火)

晴。暑氣猛烈、赤地墨透君に手代多く、貴商に出ていたりたかり山年ゆぬ旅してしまつた、近状で一報する事とどひ、長文の書を想ひまことアレとくものうし、書函紙から縁の幅一尺長で口尺位の手

何か書けといふ、古河記録裏にあく"頭の直刺すひ父の内照理"、
といふ文字を書く。人縛は軍か滑つてひと書けをひつた。

七月十日(木)

晴、今日も暑氣烈し、花火の中止が思はう十一点で黒崎町区会にかけ
责任申を消却する。九月にからぬか申し送りをい、内君の直面時
を買つて胸中に消却してやつてくれやうにと元工場者伊庭改一代に
依頼した、大体承知せられた。

七月十一日(金)

降暴雨、朝より降り去り夕刻まで降りつゝく、涼風たゞ大雨なり。岩作物の大木
車大にうちし。昨日より刑務所職員が間に應召者派出、正午数海老にちて
其社り会となり。技手三名、看守れぬ、計十三名の大量想定である。而本の山中
山中、緋、葱、秋葵、森瓦技手の看守となり。此り会はいつにても賃十萬を。
山中はかくある。年九にかけては慶正若あり。看守森木童彦君も想定す。
は君は大いに鶴鳴山の人、徳志、師周の醉兵なり。内君の父君はかつて研摩
二十三の才子教師で余は三印手の頃より教を受けて、内君は法姓子々なり。
竹所徳用を記す。七月十三日は自鶴里で、余の生歎まで修理済まで合せじて
ハシヒヒと記す。

七月十二日(土)

今日はすきまいい大雨である。昨日珍らしい通路を立す。五山は横外挿夫八人、テキ
一人に立つて、~~五山~~の縁佛となつた二四、墓地を揮院に立つたことである。
寺は荒川改山跡の向ひ側にある久遠白山陵廟などと云はば宇のちいかかり
由緒あるものなゆ。大きな~~樹~~を挿はせの三組、余は草刈り三本を肩に

責任者西門房雄は第三本を挿す、鳥山部長、飯木原田兩看守がつて
濡れて豪雨の中を出立す。刑務所の門を出ると空気がスーと冷んでくる
から不思議なものか、素面の財布が出来あに立つてくれたが、車はまだ
監獄の門を出て、大く喰ひでくかといと 葵園の人民たち列ぶのや
歩いてゐる老若男女を見ると不思議を感じはじめる。平民人お悪き
神部共のみを見てゐる間に街頭のどの通りにも生氣をのぼらせる
西洋化粧が感じられる。一旦土手に上り、又は汽船の方へ下つて行った
のが船頭かゐない。この後は船は出船者保護の眞清きの姿で、漢字は
小笠から出船した船客といふ男である。どうやら車の中で居たり船をかたたりする
鳥山部の美濃で汽船をやめ、子供大柄を回つて行くことに ある。子供
小声でメメたと云つた。荷物を挿いで机の上にそりか道中長ケルムでこれが日本
社会に接する最初の出でからである。合羽玉着て長靴を穿いてゐるから
一十四人と見えない。しかし何より食よりやや遅しな虫様の風綿で、
而もサーキルをつけて役人が三人とも胸の前でコロコロからりんか。目を
えぼ立て、焼める。バスに乗つて女が不審で、いつまでも眺めてゐ
るのか、目に残る。丁度土曜日の十二時すぎを立つたので、学校帰りの少年の如
にいたさん出立る。やはり院制といえ氣を立てる事が多い。橋の上で
往来をしてゐるトランリも何とか珍らしいもののやうな気が
した。青年をして着物の腰袋をまくり上げてマリンス腰袋の腰巻を
出した若い女も何とか物珍しく~~身~~をかねて顔付葵飾の仕人らしい
柄の拙い端末の在もつた。しかし半纏を着た男の姿も何とか
珍しい。約三四十分歩いた後には~~東~~墓地に到着する。そしての
境内にあつたのが東武線の開通のためちと墓地の入り口に土手が
でき電車や汽車が走るに立つた。墓地は三万坪程と
ある。大きな墓が二つ並んでゐて一つは亡國之靈と書

133
頃し横に既治十八年既治二十三年に墓と書いてある。もう一つは古い
古葬の墓とのみある。難波の近く生えてゐる中にはさ一尺ほどの四角な木
を立てた土塁頭か十ほどの並んでゐる。その木も窓て土塁頭かけになつたのも
ある。一尺ばかりの凡て蓋られた土塁頭がある。これは難波大助の墓かといふことだ。
雨の日は沙障のなかで家を刈る八人の団の海上風景である。花細から切って
きたハーブ、トマト、豆花、ケラオラス、キン等をたつより墓前に供へておる。
錦香、おや。優雅な感情がみなぎる。ここに埋れてゐるのは引取人か
伊もなし死後も休む所である。しかし決して他人とは思はない。同じ空
の飯を食つた人間たちである。小葉の団の人から長期圖で見ていく。
匪夷の一代記の持主ともあつたらう。これらの者を丁寧にかかる。御山
でしき々。墓に飾香を上げた上に四人ほどの饗宴がはじまる。墓頭除
去祭の彼岸と重つてあるが、この段に而格可役人か墓頭除にそれを因人
に何か即物をすまつか慣例である。饗宴が少しつゝ祝子井の吊死を一時
ある。久しぶりたつて、3天かつた。近所の長尾から遺物の事ほかある。
身へきて柴で吹てかこしちから汲んで水で湯を沸かし茶を入れて飲む。木から雨か木々く~~難波~~常盤に落ちる。祝子井は常に咲いて半分もない。
墓所のすぐそばで小さな鉄工場があつて二階
から三人ほどの若い男女を駆工か歌舞を教えていつまでものでし
てゐた。やがて三時半頃から帰途に就く。今度は汽船で、おれ助と
てゐる。船頭は七十がらひの男でヒゲなし、金髪してゐる。もし小葉刑務所にゐる
から教訓係の者が多い。石材に向つて立場を一本置いてつてくれと
物見さうに云ふ。おれは包みえりつても物を呈めて云ひながら云
そらやるから御老工人に即物と云つとけと云つて一矢大さうな手い
のを添す。船頭はめに大しておれに云つてはせぬ、にゆく笑ひながら一す
頭を下げる。放水路は雨岸近くに草が生へて33。海側には

水あかか一折左まつてゐるので因人どもが一年に手をかけて作られてやう
年のかいは能縫をひなじて云ひをから。川中に出ると伊がか大津のやう
に廣いがする。草の茂つてゐるが、すつと元気せつて利根川の底にてゐる。
~~既治十八年~~ 既治十八年 流行をほじて
すく刑務所へ。これでモロク自らのうち~~に~~に連つて行くから
裏のものかなアと一人か云へば、他の一人が鳴き聲業布施と云ふと
かもしかねえと云ふ。あそこでアカツヒニツイとすんだといふ氣が
で、暗く吸い込まれて又刑務所に連入つて行つた。雨は未だらず
沙障に障つてゐる。

七月十三日(日)

(此處)

今日も雨だ。これで沙障に連入する。農村の有紀連志は朝出であらう。
玉藻之南草紙(あらわな草紙)を見た。御魂人に向り或は昔のとく
源を取られ或は電車のねく心を昂揚せしめる。宇宙の本體に因るか
きる夢である。書道講習の担任である。

七月十四日(月)

雨。十月はじめやうな冷涼である。寒暖の急激である。人の興奮
月の色に反映してこれをも興奮化してみるのではなくうづか。教務
課書に布団にかかる。師病宿室となつた研磨の後取扱を取ふたといつ
れ近い内に是をするのが話しかつた。又実物のことと取つたのは
御(高齢の)好意ある布団を賜つた。内ありかゆる。本作の
内京し世田谷区上馬町に引渡し薬局の母と同居する由。
縁流の利用した在田紹次郎、喜鶴を読む。青年の仕事の信
頼の面壁としてのいくぶんの情痴を取扱ひるものなり。小説の

れにて此れは數々布格のうち、大に甘美節あり。先しすきの中に人ひと
端い所あり。されば大鳥の中には人氣あるのであら。

七月十三日(火)

雨。雨はやくか加藤商室のゆうに暑つてゐる。室りやうである。今日は
は金盆のゆうててヨコ腕の休みをアリにくり上げて免業となる。教誨
モテ教を歸り石田耕緑を好いて教誨師に人附説院経を説き
近佛堂にす。所長、営業袖、作業課長、裁縫課長、田人
代表新川焼香する。教誨は角氏、欧洲理財を譲つたは、川崎市の
新川被服店の家を訪ね往牒函を抱してき在詮をせられた。
アリは一トドケ、ナホ卿俊彦前御用の吟書を手す。

七月十四日(水)

依然として雨の如き天候である。まだく涼害の気温だ。トトモ茹毛
もきりと立ち北山に在るもの多し。細雨の中にありて終り茹毛の
入れをなす。

七月十七日(木)

15日も冷涼たゞ微雨が降つてゐる。涼しくてよい立地へいたどで
ない。昨夜実験として近衛内閣辞職するまことに寝耳に水なり。今次
の大動員に入る前に及ぶといはれ、足民全邦に是年の街嘆を乞
へてみに御向に之の内勤務に實心に堪へず。今日赤羽の隊防住村市二日をりよ。疼痛や頭暈を訴ふ者多し。またモ
疾を害す者井貴一郎君より吉原豊江、宇田名氏より信頼の鍋山の
公論修料慶翁方を恨めす。

七月十九日(金)

景。アリは雨降はまし仰光を涼む。御統一の云便到。博聞會
来る。馬車内にひきさを傾ぬ京した。橋井大佐に面会せしに
北極へ對り異を生じ工作に赴かずやとの話ありしゆ。又山崎
陸海研究所より入所を勧められてゐるといふ。菊痴の居間にす
心す。左、探すへを記す。

七月十九日(土)

景。アリは菊痴とれて大に當傷し甚しく瘦弱したれども二
月の快感ヌーしは在り。菊痴地主に移植約百本にの
ぶ。妻を一人荷君は菊作の理窓家在れば強て海風を
きいた。又桿木約六十本をり。これは雑地に植へ一
輪咲しきれたり。この秋ヨリ大に菊を咲かせ各工場に
配布し各労働場の美化工事缺せずや。中井屋一郎
ヒリを代の水前寺セイジンにて神奈川丸薬丸をしてみ
いす。柳原よりハカキ。駿河台ニシテに移行せられし
といふ。大原年、凌良門川を流む。田中正造翁の
毒子作りため、活動を叙す。小説なり。田中翁 小説の桂
樹は下年なり。

七月二十日(日)

角心涼爽として大雨來る。天地晦暝たり。今夜に食宿
籠を立へし。御内閣内閣辭職する。諸有外在松岡洋右の
退陣をりしのみ。彼はヨリナガ生筋に因疏せ故に追はれし
からんか。ロボウヒトノ対リ賛嘆に庭在り。大にやうべし。

内装備を急ぐべきなり。

七月二十日(月)

雨やれず。涼涼とした天暗し。室内にかけ大勢共に上社家の急迫と
お想ひの如し。今朝農場にて一活劇あり。内蔵の会田平吉が守を
打一を殴打し守を擲り倒したか力及ばず數々やられた。至因に
守に在るも守を生を意氣にして男色女形的であり、会田に好色には
特に在るも守を生を意氣にして男色女形的である。会田の最近のりるか行に会田
の腰痛をひくものちりしためたりしめし。守は擲られた段に即座に
腰にひくといひ腰痛も皆々宥めたり。余は中山牛を各兩人につけて
官幣財の仲直りをさせた。会田はれ今を擅都の主將されば守をもお高
張をも遙に及ばず。然し兩人せ顔をはれ上らせ、~~太鼓~~ 守を、~~太鼓~~ 守を、
大方でござれど会田も眼のふちかたちゆれてゐる。先の守をより
詳しい才の上話をしてその傍聴を備んだ。彼は農家の一女が富
家に女や車輿中に主人の友左の富商の風を宿して生れてもので、
つまり私生児である。母は彼を両親に抱いて他家に嫁入つた。
彼の母の両親つまり彼の祖父母は彼を溺愛したたり溺愛であつて我
侶を人間として大きくなつた。楊洲で観役に附する二年、陰陽にて
間もなく或ち農家に養子となつた。妻は養母の連れ子であつた。彼は
妻と養父の間に關係があつて雄と姫姫の念に駆られた。彼は妻を
熟考し妻も亦彼を抱いてみたらしい。彼は或の家庭の中で妻と最後の
一見りをなした後隠れていた窓口で彼女を刺殺し自らも自殺を計り腰や
トドにあやみに刀を突き立てた。八年の刑となり。官幣大手の会田は妻の父を財産上のことで
あつた。八年の刑となり。官幣大手の会田は妻の父を財産上のことで
から殺せられ也。兩人共に性格に異常性あり。久に秋中を10月30日に

終にいそくまつてある。

毎日も雨のため農場は休みである。午前中西和男君と子代書く。
柳山潤[○]表紙を依頼す。

午後表紙より菊作り表書きく。昨日は大菊中菊小菊の引致談を
きいたが、今日は苗床、移植、本鉢への移植について聞く。主張
仰面をノートす。

七月二十一日(火)

物凄じき大雨となる。朝東金を覆すかく降る。夕刻より颶風意味
となり大風浪下くしづき草木の搖るゝ甚し。農場は休みなり。
屋外掃除の部屋にておしゃを作りて食ふに脚馳走に左る。若者
元朝日真鍋宣と謀る。彼は京都の人、二十にして強盗殺人を犯す。
わりあり良家の出でるみし。彼は頃同4喫煙し将來の希望なく絶望感
にとらはれてアスコガニトロオモウニトナスの若い方下の不自然のせ活立
され体弱患癌に陥るのみでない。希望をもちて暮らすと、日々の生
活に力を抜いて暮る日々を送ること、これが民族の一員立ちを自觉しない
の遺憾は日本民族の損失なるを教訓のこと、良友をもつマサニヒ
きかせた。

七月二十二日(水)

二回間近く降りつけた雨が漸く晴れて太陽が久ぶりに照りつけたが、
しかもせよより物語を出水と本。内濠の水は地上にほり工場の廊下に
まで溢れる。刑務所附近は昭和十三年の大出水より一層ひいりく
軒蓋に侵水してゐる。放水頭の土手が切れどうかと騒ぐ大虫。園主一帶
堤防の出水光景を記した。中山は田島妻より連絡して終を陰陽

、政治めんことをしてゐる。朴烈果てに久しよりに逢ふ。この頃把別あたはす
と改打甚しう。山川の谷より一時開軍く引上りやう。而て即ち一時15)かぎ
を済みゆ。左、右半艶略也。後度前済も終り。

七月二十九日(木)

晴。大雨甚。甚しく市役所家屋三軒余戸といひ。東一里に
家を構深の流を無むにて今更不適可と更に却つてみると以
前よりの異常は人よりの事一正内大動か。而除ひに至てせる若年化
一に想下さるのからく。博上り東京。山川改修工長に面会せ
しゆ。ソ連研究についての氏及び公論化虫と付けるが原見に
研究の便宜を(結果)もつてもらひ。此をしてこれとつづけ
リ。而やナリスの進歩の意圖をかく。又心されば實体です
のことれど、山川へ本太雨氏の記念式で附る。

七月三十日(金)

天。大雨あり。夕朝小雪多雨あり。朝の然候は、熱い停電
二階でビリタタと耳をの届かぬ。しかも阿知川にまで。之にて人
の車小高かきりに向ひた。これは熱八の停車場直山名宇の一軒
に隔て夏下熱八身をもろんとくり抜つてこの跡を失ひ。一
大損失。當田(工場)を既設時の體を変じて機械化され
當田在地にて遠山に飛ぶ付き先挂つて本投げや懸投げの
舟をばして投げ飛ばし。而まけに地元部長は直山名宇の轟轟を大い
たがるる件であつた。役人の暴力からへの反対意見字車えぢわら
一の心地性を以て聲をせざり。遠山は舟を投人間でも増主れて
ころの舟を却て叱られしに相咎めたり。役人の素質の低下せし一舟でも

ある。

七月三十日(土)

天。晴。それで安気甚し。中山(?)河更に改善について成績報告書へ進む
す所あるとす。その原案を作つてくれといひで仰つてやる。原案の
如し。

一、根拠的

- 1) 亂れたり刑を確立せし。
- 2) 受刑者をして既成の不力の忌諱の犯人及び既往者を緩和せし
かたせに而民族の一員とするべきをもとめず。
- 3) 戦争経験の下にかけて生れ端派を因んで犯されてる者を主とせし
- 4) 受刑者を人間扱ひにせよ。

外の具体のもとに自防細則の確立、防空消防室の訓練、作業
操教育、勤労奉仕制度等である。

二、自活地獄

- 1) 各工場内の取扱工場で職場委員会、工場で工場委員会、倉庫下等の
委員会を作ら。(先づ各工場代表者会を作れ)
- 2) 代表者会の倉庫委員会の議長となる。
- 3) 実業隊として青年隊を作ら。
- 4) 勤務組織の目的は個人的の恩怨を消滅し、意欲を燃えさせ給人
の不足を防ぐ。受刑者同の罪区の關係、強制、方正等の等々
あり。

三、防空消防室の鍵

- 1) 職場への装備小物院、室子技術、智力、而研磨所の等々。
熟時の混乱を利用すよん心の安やすい方正等の等々

下
甲子の年

- 2) 各工場の階級階級、官子を含む都道府県。
3) 隊軍技術による最新写真技術
4) 工場競争技術写真技術部門に於ては品質の競争の推動をつぶす。
- 四、技術教育(官能教育と技術教育)
1) 勉強生は費用で奨励、絶対、拘束、ふれぬの性の意地等を、
技術上より多くの経験の源、底にたり絶滅す。
2) かつてかの技術側にかけて過度競争、過度競争、より主を起し、
ついに ~~スミ~~ の ~~スミ~~ 両派。
3) 書道、絵画、音楽を重んじる。
4) 宗教教育として、算盤説を修正技術説を重んじる。
5) 影響技術の在り、時代の技術、時代の歴史、世界の技術
等を重んじる。
6) 学習部、実習部、実習部等を設く。
- 五、効率化
1) 強制労働なり、然し自発的意志も以てす。當初の強制を有
せしめねばならぬ。
2) 約定する限界の内で生産性に力を以ては国民の義務
である。生産の増大に力を以てし
3) 各工場各工場 ~~間違~~ に一定の効率競争となり
4) 本部から各工場に命令する。
5) 車輪車に一工場が車輪の車輪作業(車輪車の作業)をせず、
車輪作業の効率化。
6) 管理者の改めて主点
1) 田んぼからの解放、雇用、絶対、力労、男を、淑闇等、以

民院への運動

- 2) 朝日、朝日新聞の反対運動、労務、医療、計画
市、飲食場における労働の虐待を糾訴す。

文、役人 ~~一~~ への第1回

- 1) 罷刑本を人間の上に
2) 募り費用を取
3) 罷刑者より個人の労働能力を手配せよ
4) 物件の請求をかゝる者として扱へ
七、運動促進
1) 改革運動は代表選挙と連携せしむへし
2) 各工場代表者を以て工場代表委員会を作りことを図りて
運動を進むべし
3) 累進所得税を活用すべし
4) 正き目的を以ていかなる行動(それによって人を巻きつけよ。而も
力をあらわさねからだ)、現今社会の多きことの如く皆等にて
運動せしめておこなう。

七月二十七日(日)

晴。蚊をもし。物、内装の苗かたの草編の蔓をしりに
りくはりす。砂地でからん机とく後せる。鳥の向ふは肺病
の陽親和合がり。土井で薬草を元に足跡す。学園工場工事し
時に比すれば、良月かで元気上くなつてゐる。末月や旬までには假眠
故に立ちどして至んでみた。体力を希望してある。よく在れぬよいか。
易のめきで、さうりやあそび、漫遊で茶を呑む。飲まうまし。缺て
彼方ではてち上げる。

七月二十九日(月)

雨。別。うつ内農の手付にゆく。馬籠裏塙りあり。かぶり上くを失
て云々。物は荒井郡を来る。矢の水家にて屋内水ひだりとあり
一家年からく而就せらゆる。ゆめ前ては碑彌良義~~義~~
本色園長桂の因縁を張ましむ。十日記入多事にて中島の作り
方といふを張る。此日ナムヒセに難頭の移住である。

七月三十日(火)

雨、暴雨前。て子か民子男の雨兄もつれて西宮に来る。~~兵庫~~
雨兄はも故く兄をいたちにかどりて来たのに驚く。民子は幼稚園の
生をい、清楚や直面目でカヌリ男をねんてりいといふが如いた。室
ふの女らしい生活をせよと諭してなく。て3年の老若一にはぢらんか。
次、さへおれまく。レザーラスムへの進出について純てのは喜び
する。レザーラスムは韓流に及ぼす職人をなすこと、伏削の済をなす
こと、ソフィア院にハテハ最古の研究の資料を活用すること等なり。

七月三十一日(水)

雨。雨の隙間は花畠の垣根の側を周絶す。荒井郡長未にて余を秋尾
とされてくれる。但民に送つてある書類や原稿を豊原へ送ふためなり。之し
より上原を見た。壁多く落葉にして柱み心地よかに思ふ。俗山に
逢ふ。白い上衣をつけたかり拂去風たり。△△△御承審守長に面写
せよとおれいかでそれを待たずに農場へ帰る。甲山のそに上れば工場
に立つ山田光施は五工場に立つ木村といふ女形に燕巣し窓室をもして品物
や食料を運んで立つもの女形は八工場に~~在~~おやぢかあり又五工場
でも陽淺窓に御山田の屋人でまたものを湯屋と比に消費すといふ。

山田かトトモ豊かいろを余も実現けり。痴情恐々く街みへし。

七月三十一日(木)

雨。かくと降りしき。大雨れ。雨の小止み隙に花畠を回つてみて
水の一株流れてゐる。矢の大谷のため土地にもぐれ水をぬ
た力をれおろしくして云々。天氣冷涼たり。今朝の天候奇絶至り。
梅内守夫李基源の方の上話をきく。彼は不満二十才なり。二十才のとき
大陸にて女房(かぶし)の師~~を~~を殺し女房を傷けた。女房の姉は李に妻慕
してその死をかづくに及んで妹を李より引取されさせり等の。李自ら津
所にいと犯謀の一年にいな心中絶きあらに極太はん人と御宝いたく
おり居及傷沙汰に及べりて。荒涼たり。李にこの刑務所に来ても
犯衆の旅多くんよ、喧嘩してゐる。余も役を廻るてゐるか、その方々に海
をきき御川を催した。腹を立ててなと御成す。大衆党中央の
林木林若か抱込鍋をいとらへてしまりにモトリ御用記者~~を~~を破滅
をして云々。又田女房李~~を~~も生にやつてゐる。大衆党中央の本領を~~を~~確立
するものなり。芝居にせし化見を足はにかに立ちてあつたと思ふ。
中山に納めて山田光施に忠告せしむ。山田はこの意慕の跡を
折断せんと考へてもたるしい。悲へをなり。中山・志告を漫
流して成御し天を祀へりとかや。サニ刑務所には社會の屑の
寄せ集め在る哉。—— おと日農場とおでしより他業田役若して
も頗る怠惰に暮らした。八月より急進、面開せんと思ふ。

八月一日(金)

暑。雨止る。神戸梅南商店主川總尼といふ人より見下しに來る。彼は雨傘のことをなくか。仲良史故猶に面會す。余の方上のことであり。頃ニこれに至りて十二年余、詩向は八年を以て、足家の形勢を失ひて人を居たことあり。しかも十を左右にて一向女房の氣勢を失し。余の一子に附もの水と極し。されど足家のお金に深憂を経りす。取扱ふて小時間、角及び胡食兩故海師に魚~~魚~~の農場~~作~~大岩正郎はハコ~~鳥~~猪~~大~~山下農夫の件につき危難をした。大岩は十~~样外~~八歳にて入獄~~入~~三十歳、定期懲役なり。少年にて刑に觸れ左舌を獄内に消尽し、いへば出られかねない。山下は年六十三歳、大正八年の米騒動の際に牢獄を打ちぬけ、遂に腰病一つあり、家御には老衰あり。~~大正~~街頭に源もあり、老の室利~~せり~~にて、追跡され捕縛~~さかづけ~~され、~~和~~息子中入~~入~~山下大岩共に車にて連かに取扱てやつて頂けまいと口を利くものあり。

八月二日(土)

暑。時々小雨あり。夜涼なり。农作物の敵害鬼められる。松原より来信、参謀上にか先日四以来脚気にて腰痛甚ありしゆ。抱病も四小食より常省にて看病あり。今は小糸をして熱湯を拭く。心掛かりのことであり。了本教海師農場~~工~~束りて大岩正郎に達して軽々しく連かに取扱ひて遣へしと遣へゆ。大岩在て余に告ぐ。花納、乾草退治をやへ。中山は教海を抜かざる男なり。かかる方放漫鈴を社會に持ち出すんをめ害か~~め~~し。不飛去~~し~~小菊の珍しい作り方、岩本總吉農園~~園~~を詮む。今は花作りの時期にあらと山と花作りの化すこれに豪爽~~ほじやう~~にしてゆ。

八月三日(日)

而一日晴れ。久しまりの急素日である。甚ひ休日過ぐと云。農場の内因に十五名あり、これだけの人材に付けて在此に行動かは気度缺かす。人からいくぶん難いこと云ひ心がちやるものあり。教海は~~所~~して事件をられたる梅下師。梅下と朝下との音の似通つてあつたの~~ほ~~低い笑声~~お~~ない。が諸は母を妻継~~と~~。めうことを云つてそれをめを絶~~と~~。いくぶんと歴史を充食でまく沈井或旅年~~の~~是かす。左いし小糸にをられうすに近~~に~~近~~づ~~ておらず。今日而ふきことあり。八月最初、夕喧免紫~~タマ~~は個人代表の健岸~~セイジ~~を例としており、農場からに大坂安政を立て~~は~~て立つ。此に今日の選舉かれはれ立つた。午後一二時半の集会の~~れい~~ままで直~~す~~三田村に即~~そく~~まつて教か被~~ひ~~房と況を立~~た~~。今交~~か~~金例から代表候補者を推されて當選確実である。たいて田山の善~~よ~~き等が支持してゐる云々と語つた。これよりはいはらいて不図~~ふと~~三東にて田山の鈴木の意志ありとて三田村は斯~~す~~向~~む~~去り、彼山~~さん~~を好白老と認め之に代表候補の選出を許すが如~~ご~~く用務~~む~~の終~~し~~て不都合~~ふと~~あり、~~ま~~向~~む~~去~~る~~に反對してゆく事~~こと~~なし。余は三田村を好白老と思ひて、效~~ひ~~也~~ま~~にとく知る。然~~ぜ~~は次の記載で世間動作を断りたり。①好白老~~の~~に關する事~~こと~~は向~~む~~すに中~~なか~~安~~やす~~に申~~まこと~~つて~~こ~~に被~~ひ~~出~~だ~~せ~~な~~。~~ま~~に比内經~~きね~~について免~~め~~て~~た~~、純~~じん~~往~~む~~、免~~め~~宿~~しゆく~~行~~こう~~にいいかに~~こ~~りに在~~ま~~れかは牧~~まき~~年東~~とう~~海~~かい~~喫~~く~~せり。②同~~どう~~人のこと~~こと~~に少~~すくな~~く~~く~~要~~い~~口~~くち~~といはん~~だ~~くことを語~~かた~~す。③田山は田中屋~~や~~家~~け~~有~~あ~~る~~る~~、田中~~なか~~かにかた~~た~~るを傷~~いた~~せかん田山の熟~~じゆ~~氣~~き~~す~~す~~所~~ところ~~をり、かゝ~~か~~て同~~どう~~經~~き~~不~~い~~い時~~とき~~工~~くわ~~全~~ぜん~~て引~~ひ~~きし利用~~りよう~~せんと~~と~~、慈父~~じふ~~は早~~はや~~死~~しき~~り、~~か~~田山~~たんざん~~かの末~~すゑ~~の道~~みち~~却~~か~~て~~て~~田~~たん~~作~~さく~~りとして改革~~かくはん~~を訴~~たず~~すといふ。而~~も~~従~~つ~~々三田村が優勢~~ゆうせい~~となり~~て~~す。現~~あ~~る代表~~だいひ~~井~~い~~(彼の暖~~ぬく~~心~~こころ~~)を候~~まわ~~去~~る~~に立~~た~~てみたり。此~~れ~~想及~~おもひ~~て~~て~~日~~ひ~~本~~ほん~~元~~げん~~なり。④田山は次~~つぎ~~所~~ところ~~の効~~こう~~果~~か~~海~~かい~~内~~うち~~貨~~か~~物~~もの~~について容~~ゆう~~疑~~ぎ~~存~~する~~私~~わたくし~~清~~きよ~~

へ入り、日三四村から来たか立つまいか 我々が太陽を立てるこりは無い
又太陽の復讐すことも疑ひない 我々に死にによりて おもむく人の事。
石田はホーダイ使い走り人の怨霊を脱せず、三四村の怨霊である。
アロハホウジイハルハル詠集の名書につれて、

八月十二日

軍隊。ひさすき弥永秀守が余及び中山を他居に招く、詔文も列席す。久保
氏田く代表駆除は急如廻頭すやう威脅渾長に申入れたり。~~まことに~~
~~まことに~~三内アリの主候猶は絶村五野で
あり。田畠堺ノやぬふ、荒き付けしと頃甚あり。既に弥曾氏の經
はきひくしててて氣もせし。余等仰いかへて即日來りてあれどに
面会を求む。弥永氏の總裁目に見えて冷淡であつた。軽くちりて
三田村紫砂場に來りて全り~~駆除~~面会を求み弥永氏より~~はづれを~~
主候猶には五野、そして中山古見しだりとすもそれと附めます。言は
せられたと説き。愚不の心尾張今せいとか、情ま~~お~~て云々ア暮れ
在り。~~まことに~~よろしくおしづひて帰す。宗東然考叢み國策といふ事
を説む。

八月四日(火)

亦画りにてやつたつ然と云ふを立馬の鳥守か見て云々で半时间をうす
して一功家に判りてし全け太股を食ひたり。おふくろが馬をせす勘弁
すと之はれん時は少く氣が減入つた。

八月之日(水)

晴、はじめて生夏り(き暑さ)あり。今日は大の音傷す。朝のうなぎ頭
約十五石の移植を左す。元ルヒリ 善くて抑芽してない葡萄約四十九で
畠地に射だした。更ニダニア細に肥料を施す。午後二時半頃、
弥永省守より手紙來(來)たり。秋庄に招けん。國産種也。醫務課長
は席し候事も多々。後、林改改に觸る。余は個人代表選考制について
の意見を述べた。先に砂糖とハバ茶を氷で冷やせしものを飲む、
尤に巧し。午時すき當場に帰りてケルマ行し、壺コ支柱を立ていや、
ケルマ烟の整理等へ、麥尼熙太に援助してくれた。

八月 (未)

事。12日事件あり。外、私を原芳(渾名を太衆党といふ)か井戸端で看守川
の元とて頭をはじめ打って掛りしす勢ひを示した場所に立会せ、ヒリスへす
取引陳めて二人を引き受け、弦弓を摺内の部長につれてきて聞いてみたと、一日の
東錦の胡麻事件と関聯してゐる。すなはち川島君宇はこの事件を憲憲
陽に口に出さずくじるゝ上で繩子いぢめを作り抜きやつたヒリスのである。一日の
胡麻事件には余も関係者であつて川島氏に直接に立会して同錦の立会の下
難役大山、花尾中山をして川島氏に立会し、弦弓松本か井戸端の暴行不
法については川島氏に訴訟し川島氏は代わる通り摺内部長の面倒を見るといふ
決し立候に立つた。結局は川島氏は直連に手を取れぬ山喜又郎氏に上申
し松本を署前に立してこれとあらした。鳥山部長に余に之を

清川名氏をして松本の謝罪かけで手を荷着させよと云つた。左の休憩時間やお太陽中山兩處をして川名氏を歸りしめたが、未だだ。中山に後醍醐して松本も東鶴をも房へりけ、左の内も知らないとアソカンした。大富の事もう一度云ひてみや」と云つた。今はまで川名氏と最もの大富判を下す。松本もお詫びたといふ川名氏もお詫びて告ぐ、元で勤兵から來てゐるか勤兵たる。松本かこそいふのなら氣もちはひつたから、附添にも来なくてよいと云つた。先刻のことは有ることからを以て車道ですかと念を押したら車道だと云つた。川名氏は温厚な人格者で手を荒い筋一つ立たないかうには思えず、手をかねて色をさめて目をいくらか吊り上つてゐる。左の左を山都守に報告せられ、都守は卫門侍外の袖め縫写原田軍、角守をして松本、東鶴兩人を直打し川名氏に附添せしめて荷着となつた。松本東鶺は元で車道のかたか、既東在といふかあり、同志僧々たるに何となく好感がある。

八月八日(金)

晴。暑きこと甚し。昨日の了りは既に荷着せりと思ひきや今朝又手動聲す。櫻内、松本、東鶺、左基源の三人は内殿の牛若と各取雄と同馬房してゐるか、仲か悪い。昨夜、~~内~~ 東鶺と牛若~~内~~ 各か口説を始め、松本もそれに加わり、次第かくてつたうであつた。向くも川名氏が我々を仕事の上でつくあつたのは内殿の或者かうだやうに担当を禁をつけたからである。それには担当の牛若と左く眞にし又内殿の或人か内々口ひ意のに知らせてくれる所でちと云ふ。内殿忽に一旅を明かした牛若は伊賀軍連の船~~船~~に向つて、其等十一人うち又は裏切者あり、内殿内部のことと他に向つて自悪しむるに通夜す、松本いかやうかく々せしも禁きつけた。そこで内殿令を後醍醐し松

本を呼ひつけ、半間を開けるとした。松本、伊豫黙すべき威太さと在つて、室崎を始めたので、余は又止め役と左て松本を檜内に御ふつけもどした。これは~~内~~ 晴~~内~~ 事よりも一層難件である。内殿、方よりは~~内~~ 人間の名を知らせよと迫る。松本は既にして云はぬと答へた。守事は顏色を覺いてス~~セ~~。錦局~~内~~ 余が中に入つて、松本は余に人の名をいふ。余はこの人かこの発音をなはぬしてみやや否やを調査しながぬしてかねば向詮とせず、其發してをらぬければ元人を内殿に凌ぐと約す。とりふことで一應納ほせられた。余は人が余の要す工事にを推測したので、かけ身を失したのである。松本はさけん元通りである。彼が松本に対する好意から左隣の度をしなかつて疑ひを遣して、行も内殿の者に反くとか何とかいふ場合りせのではない。又内殿の者が、逞張り根性を出すに物語全体の事柄を害するものか。

八月九日(土)

晴。昨日の件の余は既~~内~~ えてス~~セ~~かんやの成程す間に御となく房ちつたやうである。内殿の連中に詰しきつけのは昨日のこととする。一日荒神惣兵衛が狂図のたゞに所られた由。紀國と云つても豪傑の一人を折りたくながけた云う~~内~~ で、元男はすくさきごろニコ地~~内~~ 下三人を傷けたばかりである。又でうかいろ双傷源を惹起せしむるにひつては元の脇町の白旗を立てて立す。十時より東京、宇田局より会と鶴山に預けられし公論給料強乞二石の用を送來せりと。おのづに肉して工に一施をしてみたところ、彼のそへる所と不承の記解せし所が大に翻訛~~内~~ たりと云ひ、せや松本を恨みか正しく口ゆひもつた。然し~~内~~ 事の本體(本體在~~内~~)もはや三人を子をいふとは~~内~~ は構造れて立

又事件をもじりて、せこもので、このことは余の要する所に至かせ一切沈黙しておるやうに令していいと。

八月十日(日)

午後。時々激しき日照。表層的木ちろ、小林の名前が口次りぬく話す。今は松本より人の名をきいたる、そん人口すでに松本の字を記してゐる。あの朝自ら名乗つて出立ひきかへたが、今はばく井を失つたと悔いてゐる。又その字をもてて松本、而てとほりの字をもつては食ひ違ひかねぬし、内農の者の絶えり限れ塗工細の作物を身もとのまゝ多く持つてゐるが、間違でないか。収穫物は少いものでありますので、販売する上に内省から推をもつ理由はない。真鍋は子供の聲端をもしたことを悔ひ、皆尼の入水でもうつて泡吹くと云つてゐるはいかない。但しそれは子供をもつてゐることに止まから止めておいた、こゝらで打切つてはどうか云々。お各一人かを名をききたいと云つたが、おのの君はみな淺く了解してくれた。ちるともうにかして納はせたいいくつが、船を化す危険をほのめかして。余は事件はドつて徳徳目、船体を心配の一端もあれた気がした。陸草缺、孰知、郵便、実況の感想行動へ耳を傾かせる。氣分の轉換、寛易、思惟の空地、因人間の此間地、案外、物語りのよさ、仲直りの趣意を與ぐ。常人で異つた心地多きなり。今日は岸外船夫と一泊内附夫共が一泊に亘つて内濠の堤防の警戒りをやると手得。被當す。船役大隊員曰く、左に傷つては船力の消耗にまつかり体を解へといふわけに行かない。むと、そこは蛇へり思ふ。アキラ研究六月号上。此船旅は珍進史統の集りといへど、船旅なりの趣意甚しく原因は既小量よりも汽船路で立ち廻し、更に夏當期の一言なり。

八月十一日(月)

時々雨ふる。錫侍来る。公端江、東上村修氏と面会せしと、即ち銀聯の代表者スタークンを謁す。トーレスも卓し公端海上に載せし筈であるが、桂在島で他にモモコトアム、改進社長と横橋飯岸をりこと等を傳る。兼ねて銀聯セガルソン、エトルリの壇、立派を宣、若瓦釜山入出で、又公端社の官賈奉仕して松岡洋右、奥田の大業を差入れてくれた。河野暗舟、菊池候三等のヒムハロについての話しあり。先月東洋の際ヨビテケルええ例。四十五年五月友達宮御せし如し。田中の嘉次は川崎堅船工向つて田中はやうして(封印)あんなに見えたいたゞを云ふのでせうとぞへりしかや。今日も堤防の草刈りりたり。波る。

八月十二日(火)

晴。大雨あり。終り暴天、時々驟雨あり。気温低下し、體涼たり。花畠にて難題の移植をり。桂灰、陈永昌守長のたゞ。代表團赴才去について試案"をさもつて把も。行はる頭脳痛也。

八月十三日(水)

時々驟雨、夕刻大夕立ち。天候異常、雲脚低し。船作のふるは風次室のいいふべきか。楠下取海より呼出されて船に立話して。三回村のことをしきりにきいてはられた。三四回のスマカした向漸く内領化せんれす。牛中東二代にハカモチ、又ハクダのせんれ也。ハナトリハカキ、"猪鼻昆蟲の侵襲から見たスタークンの效用"といふ論文を書くつきを記さを應じてのことなり。勇より年代、てろ子は腸を震して臥床中の由、その他勇子の近状を取扱ふ事あり。今日

コスモスや雑草の種子を撒りす。而諸きなれば移植容易に成功す
良材は改め同様つて考へ。

八月四日(木)

宿泊雨なり。雨怖るゝし中村第一君より会続。是日は英文字の翻訳で食
事でなく考へ在りかこれにて中へあれしいことだら。駆け家へ行てもやらぬ
に在りぬらしし、たゞ文書たゞア破損から手紙の先を下に内蔵入
て而し心事れぬからう。合戦の中には大も疏忽で危ふからいゝと云つて
ゐるといへた。本と在し頃をしておまか、おまかに辛津うことで
食ふ男矣。殊外碎失の部を下に而に隣にめりて化すにあづれ
た形でめいく金槌を以て奥戸を打碎いてみる。これにて高の檻壇に
すつてゐる。半端かにづひ。○○○ 級故若か短篇や食品、
挿入を計上計をす。但このまゝ運営道の中に、取扱戸口火の
在りが當と見二石内食ありてかでれと不採用に入りに使ふと約束
して女郎に半身の刑務所に忍ひ入り暗と矢張り在る公室に入りじの
腰元は鍔並せ急子をせつて入りれてかいを云々、この説をうは
假作なり。

八月十五日(金)

雨車は断続す。夕刻上り止む。松下吉直翁至二人は将軍一物を全
に托しあれか在りゆべてして出立。但し主が正傳に政治の改革運動に附
くす限りにあつてである。全く一應走を譲した。
中村第一君に会続書く。書物についての好意を附す。類次翁とて立つて
廣山式と子産を方面、穢次をなしのなかで会心のものと見てん乃は
に教習師とかシヨーナリストとかになりて穢次と他の事柄として立つて

立くことを立として受當であらうとまく。工 破損以外の文章物を立す
を始めた。余の近状を記す中に次の記あり。“僕は當時にまでから鉛筆
にくわづことを思ひ。健康で歩きのため故まつ流すと中止したのだが、
此頃は灰いじく煙くて流すしても中で玉をやうになつて。比較整か
固定すればかなり馬鹿となりぬとも限らない。もし皆民を出でたら人間犯
され愈えれることは多い。それもかく始終に生き残らんと努力してゐる。京橋
の左生の努力は勿論である。知る教育や道場の自定が缺點する所で
本領だけのT1を指導することなくなり。通常の善良や西條の道のほか
を日々実践す。強の筋力太もちてもこでけ気付けて口唾つ聲うどり
に在るし。かく自定との統一を常に自己で取つて成す。自定が
人を弱げず、筋力をあつ。猛烈な筋力と自定を統一する人こそ
要の男矣。この階下る在調査はよくない。自定から離れぬまゝ
本領と往しかね。本領の才の在自定者であり又そ無茶不指導を
せず。僕の口業仕事人らは聖人君子・仕てなく在る如きの人の
豪傑的な人が多い。(かくからうの間)は(は)意志や感性は人間固有の
ものだ。耳たに船に人間が車の御代に考へてはと、美しいもつてないことを
年といつた日では居、感する。しかしそれでこそ一層強い記念を以てせに
行動せむと思ふ。僕にけりつまでも了然のやうなロマニスムをも
やうが。奥原のいわたを手取(かへつて)は実親条件をみつけられは
在らぬ。それについてにはじに見の親友から取へられて多いたる。事の起
因中にちよこせり事とはを前掛たことには衝突すべくで在くひしく缺
くへからざる双国・仕に取れた、やうだ。人をは實はゆく、人間は
而もを生物なぞ哉。僕は人生と人間とたす。然も其親友を
を全うする事と存し」と云々。

八月十六日(土)

晴。室がさういへやひてゐる。真夏の日をしてある。午すぎには木も登れんばかりである。年お十時頃一頭を殺すと見物す。獵師の屠殺場から若い者の歴史ニ由来る。養豚係りは筆で牡豚一頭を追ひ出す。牡豚は牝豚の前にいるかと思つてハシツついて。居合の方にくつとされてケン成つて逃げ出さうとするのを三人からつて引入れ。寺を破して犯すものをヒックリ区にて一人は人を立、一人はちきを握り、一人は首を下して押へつけサツと芭刀で頭筋頭を切ると血がドクドク流れ出す。ニミシで腰とも動かなくなつて化粧よ。歴史は駆けたもので腰をつかうから門へ一直線に立ち割り腕輪を次から次へといひ出す。男猪の体を仰かう妙童せうと牛尾の善女かせてゆく。屠夫は頭に皮と肉の肉に上るに芭刀を入れてサツく人間の頭に刺していく。首を切り落したのは猪の頭かサツと一緒に入れてから肉を下して早くハツツと投げにくつこには農場の四人のうちの三人が不文律である。屠殺場の上工終った。

午後二時半に事件が起つた。午前中はとつてないを腰内で、密告者に腰汁を預けふべく駕籠の大桶か内器にひ葱と馬糞糞を乗せしむるその犯人の漆原(角丸の年齢四)といひものをやまひそかぬエヒて割りかけたひ葱と馬糞糞を上とした。大塙川流域に喧嘩せず、巧みに子宮を内器以外の者に空合してあいつをつて内器に付する五頭が次第に湧いた。この氣のいい内江とひらみ巻を上からにする縁でなく、全く内巻の者に對する反感をもつた。かれらは耕作物を食し空食してゐる。その犯人は近時目に余る。これには泥棒の件を各が食事地が張つてみて方へ引き入れて、晝夜の盜賊や食肉の空食犯地でなく、むろ寄宿か年寄仕であること等が原因である。ニニスの足と芭刀に海

ハヌヌえ少尉を召す給水の仕事からこれらを行つて右へまつて口腹の徳を充たしておきほほえいことである。

八月十七日(日)

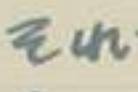
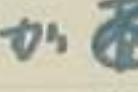
晴。今日は頗る暑い。風がなくてひどくひもします。而三日暖なので免禁。教海はちず氏、他力本願について説し、悲しみを悲しまとて受取。真宗教徒の悲しみを宣傳する。今手は既め三月三十日正午。不山寺に龍虎の顕彰を禮へ信長をくさした。真宗の僧侶は作長と在りと田の色を変へ改聲する。然し民の美貌とて、作長の姿態にもれにとつて才高も減しない。年は一般衆の集会で所聞の開設あり。松井所重、記すにはトドケの勝報黙して記載せられてゐる。ラウオドラマの放送や下山と該深の放送もあり。非常術担当るもの在り。強烈下の緊張味を缺く。タリスの筋三束って堅硬なから物をてよ。強に走りて車を走まかといひては意に在つてゐる。この男オウホ4ユニストでは船の間に右翼に迎合し、大部類の人間で、強は右翼へヒリハリ法左り。右翼は政治調停でもして、凶民大衆への威嚇左し、強しきの心魄に堪らかで尊敬できる。右翼へ迎合して車中に入り、え左翼の連中は4脚もへきぬ練となり。石玉写、死、矢、火、経等、余紀書く。

八月十八日(月)

晴。猛烈の暑氣なり。タリア知を警視す。枝を剪定し支柱を立つ。支柱と茎とを結ぶに木楔棒の木楔用木を小さく割きて用ひ。又鉛錠に泥地を合へ、さきに神木より移植せる荀子豆莢穀の

肥料をより、その他変化なし。

八月十九日(火)

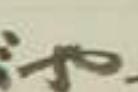
晴。昨日も猛烈の暑氣あり。たゞし朝のうち霧がこめる。この雨霧がこそ
既に天候悪化するものである。花畠に裸で走れば、肩から腰かけてせう
で汗がかくかく流れ。飯食の一つである。今朝もカルアの整理に
終始する。牛馬の田中から子と馬鹿衆を連れて、隙間
を入れて施設の工事に中止をね。内服のあやつをさに
強制せらるんといふ。四半は東京近づいたので、闇黒賊のうまい
所謂ヤマサギである。方体肥肉し  これが  面倒な仕事に
均衡を失した牛の如き硬たりて、顎面も角立つて先へ 
不思議である。牠も強烈にも衰にござりては敵撃である。犠牲を
紀念するに咲に咲と咲んで、刺さる。お撃は陽か陰で居り
物に在らぬのか、皆から撃たれると長考である。裏直で可貴い
ところもちるので、惜から可哀がれてゐる。余を現かせり。

八月廿日(水)

晴。昨夜醉酒あり、朝のうちに雨煙草をしかめておる。  今朝
カルアの整理に目を落す。午後新井守長と鍋山が農場を来訪す。
新井氏並行の夏野菜栽培規範のプリント刷を貰せられ、今度新井
氏が直にせんに付添せられたと云はれた。左、約の如く新井氏は
教務課の部長に会、鍋山、中山を呼び出し約三時間は
付添す。峰巣を訪ね時清勞下で、市長財政家の馬鹿に
憲して刑も取れる程は行に改革されぬは在らぬ。せん
度えと良縁婚入の良民の存在を強調す。例へば

かく泥舟を弄し放逐に敗けると跡口の悪い道をまひよ。七月
のくせにも困つたもの也。ハガキに砂糖と冰を入れた冷凍で
あり、ハガキ吹雪あり。

八月廿一(木)

曇。昨日から雨があり降る。朝のはじ小雨ありがやかて晴れた。麦食
清消茶、余に徳役団に余り因縁をもつて忠告す。代表選舉の時に開
催してあり。己者はハルツ親家多し。徳役団は人間にあらずと  
ハルツ解、大衆は愚鈍左近か故にモツ立役の中にちへからずトム
ハルツ左近にかは君に在る。太宰は偽被なり。徳役団は仁人君子エ
ゴイトでありそのたる所にはモチエバイスムにあつて、その貌向に徳役にか
いて一層深められると思つた。これは夷であると思ふ。年は赤痢の
以前をさす。本年に入れて四回目なり。先づに本の有無より赤痢
患者三名を出せりといふ。左、留字。

八月廿二日(金)

晴。昨日の注射のため發熱気味にて頭痛す。赤痢患者
を出せりといふは誤傳互りし也。余り仕合せず。

八月廿三日(土)

晴天半晴。はてて雨あり。難題に液肥を、タリアに
下地を施す。松本在吉黒クロスコロスとおこす。内窓の
茄子畠に入りて、先に種取し相当から忍られたに對し。
余を代り内窓に送り徳役に叫せし、その代り内窓の収穫
余を代りに送り徳役に叫せし。有難無難となる。外界
物私費を暴露すべしと云つた。有難無難となる。

の担当政治家と内閣の担当 14名以上といふ入札リストを三
川久氏は木曾重良との喧嘩の末まであります。内閣の山鹿久
澄が政治の変化者です。比男は柔軟では助かるべく個人
の株価をとつて化子をさせようとから七種ともにこれを糾
用して金を放題落としてゐる。圓りを缺く柔軟な事を示
すものである。

八月廿四日(火)

晴。菊を入れてゐる。北会お旗部と交換あり。寫すと如倍
草若本さなり。本房旗の而御陣宣元一巻を守る事一に付したと
こゑるふい手を施んでこれかかへとあしてゐる。詫みきんかた
で兩用のためいかしておいてきたと云つた。比男少年の如く無邪氣
なり。乳年児より胃腸を害してゐたので乳を抱らすにあたか
すでに令快したので此より抱食することとなる。元々の者たちに
内中から乳の駄食をなしうた。毒に申す。而当氏も駄食す。

八月廿五日(水)

晴。竹林の玉旗掲揚式に際し伊江朝暉氏の告白の様あり。
氏はひいて名す死刑犯にて仕仕す。いつにありても該君の
健康と更生を祈つておととはれた。比人は人格高尚、長老の
凡あり、近來の死刑犯而もあつた。仕仕は國部といふ人、刑務を
中つ最も多くありといふ。大坂刑務所より来たり。大坂空氣裏か
東根津中の吉島一ヒル「標節取を心以節度要清、榜道を志
希國道を招た、故不すと近習、不不立善名、不深心未矣、
絶度所才に及ぶ。せきいてくれといふはえりてへつて久良君より書く

而内既に輝矣す。

八月廿六日(木)

晴。菊の手入れをして、直射光直の中山ふりふりにてオハカリ放ら
1つある。看守長ないふしに反入と工作をしてゐる。監獄政
治家にはこういふのを指すのであらうか。彼は今日も伊左地官をいたぐ
てゐた。馬さうを人を對して強く叫びてしまし。而脚高洲の詩に
我有一片心、自共に白於雪の句あり。雪よりも潔白を心、といふもの
確にある。監獄ではそれを琢き出すことをしないやうだ。而脚高洲
は、河井晴荷氏へ手紙書く、けんにちの高辻は後藤士のいわゆる手向
へ手紙の如きをよく此となく深切に世論してゐる由、医師から
職であるか。社會産を成したてては社會の力に尼力にて
つかむといふ。せよリ日本へ接吻状を出してみてくれば、日本の文
化が進んでゐるので認められる。而脚向夫に対する政府の政策も、手
向夫の内省も今まで、ぬくであつておらず。大體多分代か
列車せんとしてゐる。手向夫はその範囲の中で勇者として再生しよつ
ておきでちる。生きて死んで生き方を生ず勿れ。

八月廿七日(金)

晴。13日も菊の手入れあり。民子のひ中村徑一君より手紙來る。民子
は幼稚園保母の体験を記す。正しくんとしてせきんとすといわ
他意を志を記してある。中村君記の有りか思春は薄着を失ふ
てスミの間で、手紙の如きを左にかちかく書いてある。ぬくにしよ
ける主婦の訓諭より精神の重複り復りか何より大切かと持論して
ある。生活に執着と超越の統一にあらといふ指説を記してゐる。

中村君はモンテーエ博士の影響深し。すなはち寂れ主義のみにしてかかずの彼の表現は意味を失く。但し思慮力は古にゆかである。
蓋し、善政アベキ友である。

八月廿八日(木)

晴。朝は霧が深かつた。夕方は涼しい風が吹き残れた空には三日月が懸けてゐる。秋の既に來てゐることを感じる。午前六時、汗あわの魔術師 ~~アーヴィング~~ 全国人を率いて新日本國部帝氏の訓示あり。而後は午後八時半着てまことに新日本國部帝氏の訓示を以てし。これにかゝり徹查してゐる。訓示の内容も今までその歴史より忠誠を發揮して情熱を發揮する。大學を出て、三十年、死刑に付せられてゐるといふ。今は一切の職業を有す。五位階級を皇正臣に更生せしめて社會へお出しだしたことであると云つた。向ふでもかん一側の現象を理解してこの実況に力を貸すといふ。古き世に改めといふことあり裏切らなくて云ふ。純至と云うやうをのぞき。犯罪も刑務所も社會本質であり決して世外のものではない。本家の民族が足跡から百年後されてもいぢる。午前十一時頃奥御神から呼出されたのでかつて風と三十過ぎの人の判子振子の人から控へて坐り、今日この刑務所を見学に来たので席に余の額を見てゆく氣に立つて心をいふ。云々と云ふと同時に手の附を帝小坂戦争といふか宝刀を佩てそれを解してみつかない。手間あり、といふと減に力こめておく。工場に近づくと丁度蒸氣笛で吹き、隔壁の丸木舟夫に口笛を鳴らす。彼等とはいかない。と左ひつて追ひ出せぬようにと云つた。仁木は慈山の築地屋の息子で後者には力に強い。午後花畠の草むしに松平、東鶴、李基源の三人に手付つて立ちふ。この三人はすかに金の門下の如くに立つてゐる。中村君ニラオツツガラスの法螺吹きも遠慮だ。

八月廿九日(金)

曇。午前中松平、東鶴、李の三人考略の如く花畠に来りて手付す。モンタントニア(モントニア)の素のいたづらに成れどもさりげない。花畠屋の雜事中に珍れどもそれをされ候す。寺東散海が花畠に来りて余の久遠の下付を頼む事多うぢ。メリメの小説や柳山洞の春序など。許さないといふ。は坊主は一番末本の散海師、船津津不就功を以て最も評判高し大男なり。官僚の中には奇妙に不況物なる者あり。畢竟に行ひせず布施に生れぬが故に彼岸世界を脱くを嘗めてを以てかねばならぬ。此岸の道場宿泊の如き立派に見える。又はらしく一度度深く來りて話しておかれた。人に九州三地の人、刑務所の職員在りて三十年はせども、犯罪や犯罪者の性格を圓て社会の悪徳を以て、從つて孔食の本質の一端をつかんでおり。至れり最弱である。昨日足元に乗りし若い刑務官の一人が高堂を出てその案内を深くして設備整へて都で結構に社會の人間でそこを医療はうやうやしくのに主婦人等にせんたくしてゐたことを。成績優良はしむるをとて此を評定し、死刑は五年る年先の四年のためにやりもので将来の所上り犯の死をもたらしむるに病院のヒビキはそれらしい。専門としてやくもかくら壁上に語しておられた。實際に見では犯罪者や刑務所が人間外のものにして取扱はれてゐる。しかし犯罪者は社会の疾苦から離れて、刑務所は社会の被虐の一部に外さざれ。個人の犯行が復讐は刑務所内から始まつてゐる。勿論犯罪者や刑務所は社会の外に置かれてゐる。

八月三十日(土)

晴。小林一作君が内閣を出て博内締合となりたし、この間に内閣に力流れていた、漆原の如き貴婦人物を美化者として載りに墮つてゐること、内閣の空氣の充満面の如きと等なりと云ひ、余にての交渉を行はれた。小林は博内、李登輝を自分の代りに内閣に入らしたる意向でもある。余はこれを難役大坂容疑者に見付けてみた。彼は博内締合の部下といつて取り止められたが、少くともことを指すより且つ小林の人物本態を説いて強き折衷であった。比喩是と驚き更に忠義を感じたのは彼がすっかり従人風になつてゐたことだ。彼は役をやつて、何とか役人に至つてやうをもがいて自己も従役であるのをされ他の従役と対立する。奴隸の如きは博内といふ心地である。まことに山口にひきのをもひ入つて従役団に向つて政治で力はんとする。この際役人の雄姫をくりひすよとはそれやらぬはならない。これらは刑務所といふ異常環境において產生する權力あるの姿形を表現である。漫生しきこと哉。大坂は即ち其完矣、驥援軍の主謀者であつた、人物中、面と味あれば、お詫の如きが従役心理に關いて至り且つ妬忌の心張し。今日小林のことを伊藤也當に託してみんか、大坂からあつて吹込んであつたと見え大坂の云つたと同じをもつて余の元を抜てした。小林には昌黎が准すれやう勧めた。以上は漆原食田等の内閣のホス巨中に小林に加へて壓抑を緩和してやることであつた。これに因して内閣、ひいて刑務所耕種作業の改革が内閣にそれからなり、食糧増配は刑務所内でも必要であり、旧来のやうな有致した精神や非能率の本體の改廃が行はれねばならぬ。

八月三十一日(日)

雨。久しい雨の雨である。雨が停むと農場では屋外作業が休むことのない人である。外役はまるで既成の方物ばかり雨降りで月の日はあることはましくない事なことであります。民家に手紙を書く。「世人の人生」上下、「名媛の母」を郵送しある者を男子に手紙を民家に手紙を出す。室内締合の岩本東にて都下に戒嚴令を布く噂ありをし侍ふ。と以つて大動員をやつてをしてしかも政治的才向を示さず、何よりも手づ戒嚴令を布くことありけりと云ふ。愛心禁じ難きもの有り。皇恩の繁榮を信する心はうきかず。八月終り九月来る。農場に出で、三十四年半なり。農場は刑務所の中でも老練を以て芳々細にみられ、反社会的な性政變常ある尼洋であり和氣よりも單氣の方流し。余は従役団として徹底すること足らずさうなり、足らずとも思はず。才角にいきをからには従役団の心理の変化を以て、自ら体験せんと思つたことも多くて此生は左者を考へるに至り、云うした心理を社会に持ち帰ることこそ恐ろしいと見てゐる。余はこの世界、体験未だよりも研究者としてうるしかいと思ふ。又久しく隨筆を廻してみながら、秋のあとこれまでのを総合して詰めてして集中に於いてちつと書物を角に手にしやう。

九月一日(日)

晨。雨雲微く重る。今日は電気会員にして二百十日をも、又緊急有公也である。昨夜逃亡未遂事件ありしゆ。被拘捕者三十九名の男。去年七月より計画せりと。鉄格子を鋸ひ切り、子彈に投げかけて上方の門へ尾も電線の材料を車めて作り上げてありしゆ。一層柱房を脱出し壁側まで引つたところを乗組五段の倉庫部長三浦喜作工浦へられたりといふ。午後捕下教海師より呼み出された。先に聞かれて曰くお体は政治運動の活動を區別をすやと。余曰く貴方の本職の研究に筋合を費したと。又先生と聞かれて曰く昨年提出の上申書のうち政治の圖心より離れたと見えり。しかし大臣宣誓をしてからめでては臣民として義務を負うべくお前の外事の体行と圖心をもつべ。併同じく政治の圖心より離れたといふを承は牛中直に此の罪喰せられし時なり。これにて政治運動に圖心をもつたの意に外ならず云々。かゝりまことに会員の皆向うに内閣戸次換手在中の約束に上れかうとせん望望んで出てみてにいゆであら。多く詫みなし。全く従従同一般の階級でゐるを詫せ心配に附りするをあす。午後ニ叶隣外の烟に傷を本ほほに内閣の局へ付たるに至りしがけたところあたたかの煙の燐によれして火え赤青紫紅色に來りついに喉元をタクリに齧られた。和田工場にてアシモニを塗つてもらつた。齧られた瞬間急歎として少く時代のこりか喉に浮んだ。子供の頃にも火薬に驚いたきりであつからぬ。少く痛がつたのは少く時代をよつと歴史したのに大きさを盡みである。今日トリタ部引上げ同様に立つた。引上つて京都師上りの百姓を祀らむ。見上りの百姓に之れ。九月五日之母十三回忌の法事を催す。昨夜御風呂心懶病にて寝むことなく細々とてあり。母上は近世られて早くも十三年。一家骨局のかたは櫻花を表へて外に不孝子をくわせり。

子供たちもそれく一人方に生れし急進といしまじめ地ト父母を思ふたれども。といふと氣味が極めて嘔氣を厭ひしむる不孝の罪義と仰ゆ。鐵格子を用ひ申入れたまし。村松精化、中河原人等も是れ。荒山故山安山河、東内山商店支那風土記を行ひ。左、右の二人はもと洋服屋として、鐵道工でされども藝術家として、萬葉の、西園寺家、中河原家、萬葉セイサウ、萬葉家を道産のに理解せりとも思ふべきあり。而後村井田博士はかの御心の偉人を描くにかなり詠歌してよそつて而心も詠んだ。

九月二日(火)

晴。朝夕涼味爽やかとなり。正午アモ強風の日下し張し。黄昏には夜風吹き鐵格子を放しユーチュウの月の上空が眺められた。窓の下に秋蟲がちろりとすむいてゐる。今年は秋の来ること早し。午前中刈り畠押芽せるを妙見よりとりて霧地に植う。根のつきたてに植へ、茎、葉にとて、十本ほどの切口がくさりかつてゐる。クロスモモ野立入り、株内に直根は内側へ、内側の字面は横張り、而し内側の気田は外側へ、外側の田邊は内側へ移す。鳥山部长の布道あり、中、巧いと思ふ。気田と字面を吹拂り合ひをした。気田はくし頭の妻をところあり、字面は女性を以て仕す女郎タイプのところあり(だも五代のやうに蛇頭丸をとつてもある)、気田は角力部の主將で七十才位、守矢ニナセアドリも角力をせまい氣田よりも巧いと薄い。気田が室外字面を拂つたのは折板に色褪の表作をあげた御姫佳のもので、字面は向の大きなかわいからむらかを絞りしておだやか、気田もかわいの丸に拂つたのが、自分で落胆としたらしい。気田は東京近郊の百地、字面は都園在の百地、お、者々義父未だし、夫人は女房殺してある。監禁心犯に處せられてゐる。構内序曲は松平とを差ぼる

とわたくか松本には孝ヒ一石の仕事は頗る忙かと云つて傍人に申出で貢物で花火を
してゐる。島原の松本商屋から錦糸町へ一日をもつた。大きい工場に廻り、一石
ある。二三日大丈へからグリーンにやつてゐる。有り得に手紙書く。高麗紙、墨上
紙面にひつての感想を記す。花火、緋茶(金葉茶)、シナリード、コラチア、丁度、
表葉、花茎葉、スギトロ、アリムラ、ちり玉、アネヌヌ、アスター)を置入を
依頼す。花火に荷くつむきだ。

九月三日(水)

朝、霧深し。秋氣引に身を如め。花火の草木かしつゝと霧山大丈はよし。
此後常同幼室に準備するため休憩時間に角力練習をす。同會
の大國くらひの男がたり。桂上りハサキ来る。中央公論社長島中氏を訪問で
る由。日本銀行より足利十日からムヒト午飯にて意見を示せといふ依頼
あり。宋内山商夫、大那肥土記憶す。花火か。杭火や清南の継子松助君
中の己写を祀す。中佐の才あり。

九月四日(木)

朝晴。天晴。十月初めの如き。直钩は内院の宣傳面をもらさる者
感じ責任者源原や担当者等の宣傳を吹掛けんと欲すといへり。ト宣傳早
めなり。松本と李基源との間差、度にこじれてゐる。花火の元ヒリ同を
作る。秋の花火のための引画の準備あり。水を瓶夫君に手紙を
さく。日刊(?)が大岩源和と世説せしアトール・ブランズ現代史の筆心を
さく。當ねて書のことを依頼す。

九月五日

相東雨あり。朝至は空晴く一日中晴れたり。煙けたりする。夕方川上

の帰命日で、船況上の電で十三回船旗あり。一日やつゝよしき心を吹てすひす
へく心掛けた。船内に今日も一荷体を出した。は伊勢總務の仕事かたずかの船房に見りて
借先中の余が在ヒツト一袋か同車を運びし上へ取扱をハナリ一袋入れて行くから行合
の場所にヒリエ来いと云つた。船内に同窓の李基源が工場へ出づや看守に密告した
で、從人には網を張つて松本の果を待ち構へてゐた。松本は午前八時既に工場にて
失散せりつて急ち捕へられた。池原船長と半田地主とか一度ヒツクを許してくれた。
その際、左あら森さはかつてみたのかと云つた。然るに午後になつてから松平舟山と
川村部長から呼出されて面接調を免げた。李にかけて松本が白米一俵を飲食
より搬出してきたをも密告した。又一肆り、外省及横井洋次からも錢をたいて食
つたのは領島か松本から引いてもらつて運んだと云ふ。密告しておつた。
李はこの白米を萩に食つたり彼の姉董を吸つたりしてみゆくせに密告す
たから驚くべし。川村部長の取調に對して松本は頑強に誠口してゐたが
舟山に傾いたかの如きにかゝつて余の名が引出されやうすやその關係を一切
取調いざるを条件として他の關係については告ふをやつた。余を
想かぬる怪跡をそぞろに見る。舟山は身に調ひられたかと云は頑冥、左あら正
視いつけて導かれたが松本が財貨をせてもつて予期を免れしもので、如何を
えんに従つた。松本も舟山も焼夷旗にモ詫すと云ふ而合きと云ふなり。此取調
には森井部長も(?)立合せ由。此事件はかなり大きな犯則であるが、池原船長は彼が
船員の宿してゐる所を荒らすことには何れの反抗的行動を示さる也。さうにても
度の宣傳に犯題暴行す。故に木戸のたゞ「房上ふ玄蕃元」、幕節
の連句の井手のうちをしのぐたしかひもだまし石とほゆ。西村馬鹿の
のえりに「エドをば名としなつて人の世にまつゝ人も残りつくかね、
を嘆言す。

九月六日(土)

晴。今日は甚だ暑し、内装の人々、油汗を流してゐる。金は太の腰袋に水虫かひいて、股のつけねまで、筋が、つるやうである。幸運作友英門等より送られしとせよ。幸運して中には松本夏絵等のことを訴へてモリ中山さんに頭を傾けてやつてゐる。石谷亮吉は嘆き心配の微弱の表情にあり。今日又一件あり。新設大塚の牛屋田中を改つた。これは田中の大塚の従人化に反感を抱き大塚は従人とくらになつてゐると多く従の方で懇談を云つたからだといふ。大塚の授業地については多く指摘する者あり。日本維新に對して表現せり。せゆり夏子は「柳木ぬづる」にすぎず、先にストーリーを説いておらず。(大塚先生なりしき)小林○狂人記より平田篤氏の如何なる予想も成らぬ如きを含む大富院招手に附せられしことを聽じ来る。小林君にさよまく、二度尊仰金を貰入で伝れず。

九月七日(日)

晴。朝のうち房内を拜院する。夜間のみの使用だから拂除かのつゝ而川扇で天井の蜘蛛、紫か少し張つてゐる。午前九時より教海始まる。南教海師の御会にて教説傍聴者加藤左近氏弘化的被説を寫す。お仕刑語形のと多喜では十一年左物したのを云ふ。左近氏弘化は低声で隠匿をせいでちんしか詫問に及んで詫問時左近氏弘化を力説し、この際個人の教説語句は断して許しよせんと云ひ、當時左近氏弘化を張り上げて個人ひそか裏腹を拔かぬ。而もかゝり教説あり。不十六度もあ請せられん。元の教説絶りしは、浪花節伊崎左近郎の生立のレコードあり。左近郎が大和の士へ手を殺し、左近郎の父左近郎を説いて犯者の穴に与へしに後者に左近郎の穷屈と義に感して義子にすな詫しがり、

國人の間に眼を拭ふ者多し、隨處にみたるは一例也。浪花節は一士らはえぞアと大佐を知らずの近所の者から吹き出された。尋事の大衆とインラックの威風、色棒判断、美の御貴等が對立の所たをいふてこそである。幸運又教海師は二級をう集氣あり。かけのうなまううけ放送あり。この場は久花勝一君より風間一郎までヨニ仲川洋輔に均等せられて人々と聞く。森の団結あり。左の原達に心生るよかたり。夕刻、竹山東リて迷惑かけたりと謝罪しておつた。大手芋蕪コヤキを入れられたのでかかづのこともなかつたやうに元氣である。夕飯は川村御菴某にて餅を同色に染めをしておつた。竹山にセキを入れて召んたり。せん乱暴にして度に威張つたせんが如く、良田家のまろしい潔治と重聲あり。國人のうちでも呂四郎の者に對しては極く上い。而口は一叶預言して嘗した。

九月八日(月)

晴。午前中、内装連中の鳥羽室トリを手付。午後を夕御飯にて食す。枕草の季に對する意象意えからず、枕草は役人に對しては病のに食つてかゝる。國人等は喧嘩せれと云ふて主に對して度に弱し。担当を面つて主より妥協を申込み来りとて主の衷切りを全く省略しゆうとする。主の意即に上り少くとも升山が改められた。升山に對して御玉なことに云ひ下す。主は主の意向といふことの根柢の有無となりしと云はれてや。國人等の御情心配の一例を取る。候事國人は云れど、一矢の如きに於て精神痛苦不を見る。登すき風間太を君か~~國人~~三之端の抜手とせに近所の工場にて来て立ち寄る。中：元氣上し。主君のことを語りてゆく。そのお勘せり写真品工場で文豪阪本

をもつた男女被工を集めて食を作り同道船を作つて船の往来を止められたのがさうだ。赤いししゃものいいかで微生物をも断滅せんとすら当時の想方に涼としている。文書には食の食を心配もなきことなり。しかし君が夫の入松中かやうなア想をもつておこしたのは現今をせぬかとす。

九月九日(火)

夜東雨あり。晴天となり。あてらぬ久留米男である。旅館よりゆ。てこの胃腸病合併セリと。余の仰述せし「又僧の母」を始めを流す。其由來はため太めかりとなりと。民事は保母として有間してゐる。即ち元の世上十三日忌より現詫なくとも集りてよく近くに在りて、即ち氏家甚は友一氏夫甚をもててえどせりと。而實は大勢に帰つたら日本國にもうほんは奥さんからぞまく夫山とおはしゆを接待してくれた。午後舟の舟入れをす。松岡洋左氏「安政の大業」を聽む。犯済系朴を急かすといひを感熱、犯を追本、正義犯等坐にしてより解小政治家を説教後にて、海山の良すの通内の販地主税を叙す。仰面を詫むと深死なるものあり。その時海山放棄済まで引いた政治家近か今は口を拭子で野原割まで歸つてゐる。おとひ本は松岡氏の門下生にして第一矢内氏・丸山・上村・豊原の寄贈してくれしもの也。

九月十日(水)

朝。温泉の泉の物語の内で改訂簡字版のはじめの方を読む。驚きしことなし。

九月十一日(木)

今日も雨なり。二石廿四なれば一石五分。風なし。午後雨の晴人此間あり。作業深長見回りに来り、仰をからく西んでスコット船からつけた。そつと屋敷の庭面が降り去るに拘らず、内窓の匡十に烟の中でモリく仕事させられた。雨がなく激しくなつたに拘らず、犁で烟を銷き直してみる。余は左足哀れ歩ひにくくなり腰部腫山とる。頭々不倫状たり。メリメの"エトリウムウダ"危む。

九月十二日(金)

雨、外晴。日がし弱し。水虫禍、脚部發熱す。左つま先の毛口毒あり。皆未だ。日本陸軍より元々十ヶ所に於いて洋艦を修復あり。駆逐同エ~~テ~~拂り残軍艦を運載せ~~テ~~セリにてその切核をもつて見て貰つてくれて。橋下板海師は提督オハヤ吉の下書をもす。

九月十三日(土)

朝霧深し。午後日照りとなりておし暑し。民子ドリ夏休はハの幼稚園生活、平日鈴氏より帰宅(海山に上り)の接觸され、赤代不^レり母老死の事、これら車代あり。お夏利ム布にあり(川に咲向娘のせのむれ、お夏利娘の而久移送されてきて旅居にゐるゆ。

東洋社
月刊

~~水口の旅~~
~~水口の旅~~
~~水口の旅~~

十月一日(金) 郡嘗祭

長い毎日記を休んだ。此間約一ヶ月余。市の前衛生活にも多少の変化を生じた。九月廿一日在室のうちの水口より毒菌侵入し腹部腫れ上つて人九月十六日より病室に入りたる土肥兩等の手逐ト医療に上つて全然人二十日には退室し再び農場に帰つた。病室にゐる間に日房の泥棒ややくざ者から男の上話をきく犯冤者世界の心地にふれ不思議な興味と深い姫恵を感じた。病室の看護士には面おみの人物が多大。鍵子の侵害、向井米吉、大坂の石原長岩で同男として在ぬと先に本末を教へた森田に御医術、猪瀬の妻の女従者藤田妹術や比風など。

九月二十九日鳥取郡長が福島と東京に向つて農場の事は役に付れと云つた。犯在勤務をしてつゞ大坂の嫌気がさして(強制年金であつて中に役員にはならないので)辞任したので余にその方とせんといふのである。大坂君とも話しあつた上でそれを承知した。勤務とは農場の年給的仕仕事とある者で有效に働きいかない個人の略傳は役に立つものだ。余は又家の銀行の支拂ひを元氣に稼ぎを努力して家内に宣明してみたが、個人の荒唐で貧弱にいくぶんでも大切を止めため、家内に勤務を乞つたため、~~個人の勤務~~個人の勤務の上話を聞き刑期りき人を頼らしく連れて取扱せしめられ等、個人を扶して勤務就任を(故ゆべ事は説き)承知した。九月二十四日(金)個人に食事を食うの際~~個人~~告げた。
(名前)

多くの個人は東の勤務就任を喜んでいた中山のみまは大にふれだ。彼は勤務になりたい犯人があつてもすかたりアテかほんたうで、今に三直接裏をあてこすりを云つたり私にまはって殺を実効した。しかしむけやねのぶりで何多結果はない。

勤務の取扱ふ年給は~~年給~~圓~~円~~。一休~~休~~に農場、全勤か

決して十分飛躍されてはゐない。

十月十二日より防空演習がはじまつた。余の主唱で家橋で屋上と地上の消防訓練を行つた。全室に火配した。火が行動したのをつた。PCRに二回行つた。

今日の沖縄は美しい朝日昇に恵まれた。午後十時又伊勢引客を遠くから来た時に我々も歓迎せざる遠くの式典を行つた。そのあとで岡部部長が完全燃焼について講話せられた。これは民の二十多年來の皆様のこととて堂に入つたものである。福島の所見際に随伴する緊張といひ冠の有耶近(と呼んだ)。

午後陸軍報道部映画課にて『聖戰記』、『伊豆遊記』等他の映画を行つた。此頃をも鮮明の実景に感動した。但し藝術的な精神は衰弱あり。本邦の作へ力乏しきを嘆き。

夕刻、旅夫を抑束り或人の行をうりて昨夜近衛内閣砲兵隊也方を傳ふ。恐らく対米交渉失敗のためであらう。政治たる君主の體面、失格、衆のへの媚態、国民への背徳、かに豪傑、我が胸へ充つ。

伊東致、現代の交渉よか。殿、而もし。而もし。而もし。而もし。

十月十八日(土) 雨

正午説正社説時大帝の正三日で天皇陛下御誕生日である。午後より御内閣を期して追手の式を挙ぐ。そのあとで橋下教海師の講演が江に因みての講話あり。

現代の交渉失格の社會構造よりの論をし、政治院派の批評。それよりに流れ作用しておこし。

十月十九日(日) 晴

昨日は雨が降つてから今日晴打って爽やかな秋晴の美しい日であった。秋晴が来てから省守長や部長が屋食時に国人と一緒に食事を行つて食食す。凡てかはじめた。今日は易山御本が食食した。実の血衛内閣瓦解して東條英毅院は中條が組閣することとなる。内閣の顔觸れを見ると本條の不変りは元は左側かが教皇への決意は左省壁面であるらしい。

十月二十日(月) 晴

この難役の職が中々忙しい。小松葉の拂下の整理、門牌表の整理、住民の死亡の報告書、至物と冬物との引換の世論等々。般々一人あたり往付懇親と左をめし。大体東京方面までにしやう。橋下教海師に本日にかけてにあつて三人の御用向友(橋田、吉野、森平)に對する局の至重の取扱を難ず。橋下民は僕及び他の臣の反対に最も苦心すると言はれた。

十月二十一日(火) 晴

正午に石上久の地上の防火訓練を行つた。各工場より見事に来ても約二百人。そのあとで木屑を中心の焼成炉を大家等と携いでゴミ焼場に持つて行く。即ち橋下教海師は山本翁の路傍の石を極く短期の約束で使ってくれた。これを今地頭に記念地団地に立てる所なり。久しうに後、活動の歴史を立てる。

十月廿二日(水)

晴。都師より來宮。メキシコ歓迎式の東洋の室をひけ付す。
頗る人を以て周围を廻城し同風の大學を以て聯説し
舞台監督の生活をしてゐるらしい。外語を操ること大々忌む
たりと。元も生き方左り。退去を計るのみ。一年半ほどの
書簡に接した兄夫婦の在り思ひやうへし。やがて男君より
來書。旗田篤、支那民族充尾史士送ってくれス也。都師より
消息足絶ニシ。加又三、崎居き墨一挺送り來。

十月廿三日(木)

晴。防空演習本格的となりて明日完全化。防空管制を終る。飛行
場内にもかくさ道筋下、焼夷弾筋下、火災等の想定の下に練習の
訓練をりよ。待合に鉛木えり尉以下三名、防毒面具を元より附
以不~~四~~五分、消防器に十名を助す。色々のへまありますしゆ。
因人のからしきと之を例にて見た。懲役心理極悪すべし。
実戦の際軍事部は飛行場にて警戒する所あり。

十月廿四日(金)

晴。昨日防空演習施行。市街には爆彈落下、倒木等ありと。
刑務所内にも社会の空襲警報に應じて、都交總の訓練
を行ふた。中村近一君の來宮。廣島空襲より觀察の材料をもら
ひうけたりと云ふ。オレント、ナガモウアルド橋を述べて此處に~~一~~と
例の如し。泰東空襲院上に歸入せし。聖堂用半紙に見上りの
差入の墨ナリて行成。倭漢朗誦集の順序を下す。

十月廿五日(土)

晴。防空演習は午後十二時を以て終了。大隊、教団の演習に準~~準~~
十一時迄の消防班活動に赴かざる者少いことあり。女優は元太舞完矣、政
木、鬼瓦猪等若者をつかれり連続人化せらるべ。男より東宮、
宇松の有様をい細々と認む。東宮御内閣石や堀の御室を不
躊躇~~ゆ~~に、表几から、十七夜快入り~~走~~来。オのものは近衛家外
侍行成吉倭漢朗誦集、宇~~ニ~~モコロ伊豫丸、元三のものに宇松等
家臣侍行本草白氏詩卷のそれぐつすり布である。白氏詩卷が
妙年の直隸にして他~~ハ~~筆者を異にするからと、傍者は云つてゐる。
然し道風の影響いちじりして白氏詩卷を行はつてゐる物のもので諸範の倭漢朗誦集は彼の独創なり個性發揮せらる
いほのものであらざり乍きか。

十月廿六日(日)

免禁。午未時。教海寺本教海師。才人以て遺稿を託して
タリの意旨氣を以て演説せられた。平生因人に不記切至りとリト
確判~~ハ~~と思ひ合せて僧侶の徒~~ハ~~既に何~~ハ~~かの宿善模~~モ~~リと思ふ。
エリハナ、家族~~ハ~~いわぬ。因人一級者にこれまで一四十年なり
葉子を實はせ(被追号) ふんかうねふ可~~ハ~~とありたり。これも
統制使角~~ハ~~れなれど。

十月廿七日(月)

晴。南カの聖古~~カ~~を已~~ハ~~。十一月二日、体育大会の開催到。地主南~~カ~~
氏に告をを呈す。優柔として即~~ハ~~の一宇を缺く。既而當に東鶴の後進
派を推言せしめ問題とされず。余は東鶴と林亭を促進せし

りんと圓約するのであらか陽光の足元に波打つて暴れ者の兩人を放と
記して又えりやうに在る。しかし彼等の元氣を失ひし。

又本日の移動は、いはぬ用意し快々として樂しまれ。難役の予備も弊はなく
他家思案の暇も見出さず。自己怠り勝ち立たずは恥がやし。幸いに病ひ
りく食事をしては治筋の佳時期にて、口記を重視す。

十月三日(月)

昨日まで墨り室であつたの今日になってククリ腰此處を施設の日和となつて。
流石は明治節なりと思ふ。我等明治時代に生長せる者は今更にこの榮業
ありし時代への追憶切なるものあり。午前八時半より廣場にて明治節の
祭りあり。次いで体育大会開かる。南北会對抗大樓で四点の差で勝し
くも北會敗北す。地味に大敗す。しかし獨引、リレー等には勝利す。夕陽
沈む間に終る。千余の因人娘として手を拍ち度々やう様にがらし。越
國の娘でも醒めてもぬ隠である彼等はこのやうな瞬間につき隠隠の
鎧を忘へりなり。

十月四日(火)

又の日墨り日となる。難役の用務何とかせし。昨日は十六人の役員者
あれど、その中に金代を桐谷も含めた。三十歳の老貳角
い退きを犯さざをゆむことを切なり。つゝに金代を、迎奉を
大御宝の直前にて行ふ。廣場の大塙丈二点、銅材の尾根
五十九点で大塙當選す。緑派小民をほの先生束りて金代
より選まし六十人はいにラヂオ体操を教ふ。有り、元氣のみ
廣場の日課表を作成す。久しぶりに墨字する。

十月五日(水)

晴。足痛ややよく氣を失ふ。十一工場のみに適合すれど標榜を
募集するを益めて島の郭城の田井家に在り。此は七日締切につき
施し考案してみる。左は参考にあらず。又兼ねて橋の設計が
上り出船木の才幹を以て書にこれをせよとなりし故、簡略に記
めて置く。せばが農村生活を主とし、東洋史の研究をするこ
とを記す。技术会議、行年後度調査集、関戸氏の
大久保政宗の記述、又方には日本古事記の事から
そんと甲子年にお参して見てを。

十月六日(木)

晴。十一工場のみ適合すれど標榜の募集一應的。次の如く
の大地の労働を通じて力を得更に
の労作は神佛を信じ父母を思ひ労働を軽い上手一派。農業
増強の政策に放棄し以て相応の勞作に委託せむ。
の農耕生産増強の活動は主に農防改良促進へつながる
事である。

・隠隠の早歩を走り生見度の跨りともち已れで捨て窮屈
底辺の坂をよけむ

・足立一派、力下室壁から十一工場を卒出し、牧牛の早歩訓練と
駆除の操作のあいに畜力、焼夷強盗等の心配らず
(即ち生れ故に之を化金代表選奉を大御宝の直前にてりふ。
廣場の大塙當選す)

・ヨーロッパ一館にも行動範囲の廣く放逐しき更毛の
雄ひをニケよ

十一月七日(金)

晴。家に日本を日用品にも慣れていた。林房施、而御院室、丸山
義政、左内半時、山本有三政務の不、布志陸男石川川内好洋をば
たり。叙事は政治生活をしてゐる、好意を流す瞬間のみ精神の自由
をもつてゐたのかと教ふ。赤井は益達君より島木作、運命の人々
差入ありたれどこれと回旋せしりんと思ふ。

十一月八日(土)

晴。古鉄回収運動あり、農場より約五十戸を出す予報あり。
松本曰く近く中山と衝突するかもしれないと。いかでことなせぬ
やうにして石けん云つて行く。吉波浦を修理する所、現在
十一月うちか在りて石けんで一覧するこの頃、流石大に悪化してゐる。
これらの方々に歸くを心とす。而子もとも有り。

十一月九日(日)

急案。教諭は細室教諭。三毒の説。紀心中シ毒を充吸ひ
しての東重行領事の建設ありればさと見込を云つた。諒に
せり。しかし該領事も容易ならぬ感を認められ、教諭ヲ財政監
にて松深より桂深かけさ算や越後郡子爵の中継放送あり。教諭宣訓
にして耶奈に教子は言なとしての不踏性を意味する。又声洞の
開通にして口づ解説を缺くは故に地主の入居が白色立てもか。
更に奥野は豈て日本人かアヒロの力を認めていき、正月を放送
した。其人の中で巧いのに感心したの灰、民子及び内藤とおれ
せて。教諭には也崎信夫、蘿草の作り方を民子に教わる事、之
を耳や手記を依頼す。

十一月十日(月)

晴。妻てて来る。かなり郎かである。皆々 健康である。民子は幼稚園
女、妻子は萬歳にこれい勉強の由。去秋の晩は鬼門に住みるが故に
おへしゃれ心語りがく。

十一月十一日(火)

晴。今朝監房衣食料となる。菊池~~の~~他~~の~~被服の十数点を揃えひらを
除開して工場食事の衣服を換へてやる。次に夜はいやそれも内れ
も娘し。榆下教諭より手出しあり、今日降らせ手記について
色々語りあり。あまり多くはやらず穿著よりそれは、ゆく極め
ます。いはゆる内向の東京の利用せられてることは難~~く~~ せん
でそれと共に能きる。松本五つ銀札による、現状の
所跡について少し考へを主とめて貯めたり。

十一月十二日(水)

晴。松本君北浜道へ押送せらる、尊夫。比人豪胆にして完璧
あり、役人も辰も思はざること福せざり。階上おもし。又幸谷伊地
は南洋行り幕系に應じた。探査未完なり。先般来院の向ヶ崎
及十名を押送せる由。従役四、五時始か反映して散り散りとさ
ー似たり。難愁に似たる情狀あり。

十一月十三日(木)

晴。凡邦江口明候通り。丸子、教諭、子萬子等の手記ある。
丸子は尼道にほん字が巧くなつた。心折つまて教母の頭には
いえしむ。而中耕といふべし。教諭は太源より回復して在所

新潟の秋葉緑葉節に現しむこと多しが、比婦六十歳なり。
二兄三姉一妹、それに家をかうて七人の内院生は恩典なるには
衣よへし。才れ子の家けりつまでも幼弟氣分を脱せざるめし。
人老いて兄弟仲よく存るといふは塵である。

十一月十九日(金)

昨夜から雨が續くし一日中小刻に降った。久寒の雨であつた。これ
で鳥もうつはよ。といあしめりむとる故国人事口々に言ふ。
風邪いちども不する。

十一月二十日(土)

暴れ。緑旗十一月うにひ。比地名は別緑のアリト、
生活の重いもの部面をかうりよく代表してゐる。偽善ムソト
生色あり。書道十一月うにひ。格久向急めそなり。象山の筆
まんすもしも敬服せず。詩は巧し。畫は中々上手なり。

十一月廿二日(日)

快晴。アシロは晴れて免葉。教海は加藤政房理官、志賀
義雄の母の例をひいて母免葉に及ぶ。午後は東宮にて御
なし。ラジオ放送にて講談由来是免葉の小戸山御会をさ
あり。久しよりんて行跡即の賄書をなす。

十一月廿四日(月)

快晴。暖て晴い。中村純一君は東洋毛織より手紙。
お詫びに十九日中戸丸丸の汽船にて上海に赴き總領事館

の論述に在る也。中村君は五度らず總領事館に設立すとか。也。
先般小林社人氏に二空等佐翁合名を差入れてくれたる所即ち高
太翁を~~西~~因して身の為を拂り去つた也。

十一月十九日(火)

快晴。小林社人氏に二空等佐翁を身の為入の池状況也。
次、墨田川船を臨む。これは近衛不復復讐事件
を記念して墨字手本とさせり。

十一月十九日(水)

時陰雨が降つた。朝、霧深くれば堤下で食糞工場内にとひて、
大根や人参の排水が終る。秋田刑務所へ伏刑刑務所より犯人
八十人送つたが今日まで二十人遣されなどとて。この中に
獄門の死津せりあり。比男は東京でやくさ緑葉の一元もなし。
秋田にいがてかくかくに怒る也。角力取の高見もゆく也。

十一月二十日(木)

朝霧深し。今日も九時頃まで食糞工場内に封鎖也。豚
の糞端ニ歌あり。一頭は仔豚十を生みつゝも倒死、一頭は
一死子を生み五頭の生きのをもんか仰れも弱々しうり。お夫
は原、お母は萩原の御育せもの、両人の物語方のつかう歌ひぬ。
兩人とも角力の凶威也なり。いがれも刑務所では異常に激しく苦労
して個人待遇と年齢が早い。萩原は大正末年から入所して、
今は最さつ地位に立ち。恐く獄放期が近づいて食せられて
(個人にて) ある。彼の受持では仕組しかたくさんため。この兩人とも

将来いかれに在りか、かしらのためにも彼のためにも口宣ひすへをもの
かしとせず。

十一月廿一日(金)

暮のころから雨となり。今朝も雨が止まず。空氣きなり。農場
に荒井部長の錦山を伴ひて来る。荒井氏、主に上層に福井和夫は新潟改
にて、政治綱領を掲げても自らは色なりとて故に換手せ刑務
而上司を購入しつゝ、早速に來る。此を農場の荒井部長とも
並居する大又錦山を伴ひて来る。此を農場の荒井部長とも
並んでモリレといふ。此人豪放なれど心細心あり。農場
のため貢献せられんことを知る。

十一月廿二日(土)

暮。昨日の引者祭と農場より大塚定次と宍戸暎とゆく役取扱に
たる。大塚は元大蔵官員で椎木村の名前、生糞発生の衝突事件の責任者であつた。彼は亦毎日牢をなす悔懺してゐた。因人代表に選ばれたために
大塚の傾向を急速に示した。れど仕事せうむかづかに警戒地帯にいた。宍戸は人殺し事件である。大又尺に近く皮膚赤く肥大漢で
れ強引に見し。息子二十歳若かれり引取人たるを拒む。尤も
宍戸は息子を歸り家出して十日間に犯出し徴役に八年居て審査
にて免職ふ廻りたつから子供の處の無理である。人見
色えことある故。大塚が役取扱で去るは因人代表に
中山政規を推す運動あり。権限過渡が首領なり。被弾して
くる。化し申ゆる現象が肌は戒心の所あり。

十一月廿三日(日)

暮。クロス引者祭にて免職。代役吉田亮氏來てお米の説明
演説をす。代役土鬼からとして百姓農土農方に講話を、
衣服したり。該会は役者たる点は可ならずとも是後螺
貝の東洋は彼の但地を淨化す。孩子的の柔軟を御佛に祈ること
言つて七度を下りた。そのあとで戒律津也が七度して十二月一日より
受刑者の食糧減等せられることを説明した。本日、役取扱大名、
元のうち農場より太田家安政、宍戸暎の二名あり。吉本富太郎
の「東洋の体を及ぶ者尾」を読む。期待せぬほどの面白さ。
原記は頭脳をき抜、基本問題の奉尾を捕ふるに拙なり。十三
に記載する。小室、星、吉田たけ、封筒、便箋等を依頼す。

十一月廿四日(月)

暮。夕刻に在りて東鍋と田沢に宣嘆す。原因不明在り。東鍋
は二十才余者、田沢は内農の責任者にして三十余才、田沢は先
き頃責任者となりしが故に小姓を故内農の室屋面からさる
めし。東鍋は余の愛する弟子を以て宣嘆早に聞く。不承大
取の害害を疏遠す。

十一月廿五日(火)

小雨。昨夜はいと降ったらしい。午前中而長に而會す。山城の
方針につきとぞ。南洋草傍、洞庭北面もからんといふ。而長
和夫は日本統治研究をしており云々と而長は日本を守めてゐる。
秋の好向と改めすべしと宣す。今年は好向してより八月
徴兵の頃に地圖をとすの利害而役人をいわさんとする。此外

して優秀を次第に傍観を蒙り度し。紹博来る。有力在
論文書さに年長しつつある。橋井大佐に勧められて大川周延
に初次会見せらる。危機実事換洋されたりと。

十一月廿九日(水)

墨。山内閣。三田村の密かにて相馬に提出されました。彼は財政方に付けられていたのが實は政務向者であるといふ宣傳が下ったわけか。彼は並んでマクシス、カレーニン、スターリンとかを信託し、索め立つてゐたのである。(中略) 何ゆる好向者に付して直接討伐はしまつてきること(三田村の付す件)を意味する。もろすことは本人の胸中も呂翁の胸中もよりことである。併れも好向者、己れを除かずして立ち去りてや。鶴山が孫永吉半蔵の妻、獨身となり、孫娘に来て。左妻にすば断ち立派に面識をしてゐる。彼は、故の白く立つてゐる。

十一月廿七日(木)

墨。梅ト御海岬に面會す。余の心境をか語したが、御海岬頭に觸れて。御海の日本文化論をその根柢には時代的の立場を認め
難難をあす。又文化を高度以上に考ふ。又元来彼は詐謀的日本文化を認為してゐる。梅下先生はこれとせひにひいてみよと仰せあり。此より相馬三郎の頭上にあ。孫永吉半蔵の事務室を訪問す。席に龜川花あり。久しよりは私の政局観を聞く。例の法螺丸よりおからで觀かところあり。孙永吉は本物改革家少しくあやてかく。

十一月廿八日(金)

雨。暴風雨に似たる強雨降る。しかも電風にして走る。午後はより昌山部长となりて十二席の華会をさうぞ開く。それが陽りぬの形式及の精神に従つて行ふ。今まで復振放について成績の後人に因るしてこのより発言すと云はれた。部長は又云ふ。自分は舊い人間は必ず許されて教養あるが決心であると。氣を付けて多聞のかいじゆの内に眞中雅談せざるべ、ラヤオニース、際、担当の許さなくて離席せざるこゝ等を約束せよと云はれた。(華会は出席せり凡て名の個人には好感をもつた。余は發言して、いつも薄御前幼を隠せられてこそ日本人は政治であつて人間でない。此華会におりては人間らしい呼吸をすることができ。個人といへども日本人。今日の御局は日本人にまづ日本人の自觉と責任力をもつた。これが一として華会を真宝だ。此孫内閣として皆職務の完成をやつて、その後に華会に移りと説かれてそれから部長の御心深き、~~御~~は感謝に堪へぬ。個人の体操と又付けしも無理からぬなり。)

十一月廿九日(土)

墨。帆張の開拓、エコノミストを中心とする。旗田鹿、支那民族の開拓、流す。支那史通篠原、中西に聞くまである。夜、鷹巣に腰しとりに腰す。森咲曾宇長が、空の空房の席を取けてお邊に坐つて色々話をする。日氏は新日本書道の会の幹事となり。さすがに著述家、著筆をなせしむ。北洋人の除でのところ二人を詰めたり。これは日本は本ものへの欣求がひそんでゐるであらう。(居、東鈴小林一行の顔を一つなくつた。松平の祝言によれば、慶賀喧嘩なりと。小林の肩が腰つたて裏面に肩をもせしかねにせりしものらしい。但し東鈴は小林が彼の背の中にありし革を穿んだといふのであつた。)

十一月三十日(日)
晴，时而小雨。晴天かついきすぎむかと思つたり又いゝあれど
もしれぬ雨の日や曇の日かついく。地上に秋雲淡々からであ
らう。又東京のやうな余りに膨大な都市を作つからでもあらう。
后夜に鳥山御内か一日と同し食事と宿した。これは食食と
云つてJR西長野までいらはじまつた風でゐる。形式には流れ
さらんことをよし。

十二月一ヶ月(月)
と。今も年すには一ヶ月と云つた。空氣も漸々涼しくなつてゆく。諸院約掌而も中村長即氏乃ひ教界安保士氏又ゆ、而長宅にて而長、太西氏、楠下教海師と共に游ぶ。此好向者をいかに説向せしむべとかにつき軽て其心せんべ也。而長宅上部李昇の手縫帳あり、畫驅山岳風化眼の八字、筆力あり亞力にしへ一尺乘快なり。左、小鹿形形而鬼虎增强策なるものを掌しにいむ。

七月二十九日
午後晴。博東。毛井里-御衣寄貯の東洋文化大系、
その他零星類を差入せしれ。年田熟先生に而
受け由、福布岡駅に落着じかもりと。やは參謀本
部の調査機関に備はれらし。午後因人代え、
琴か御あり原場で行はれた。九工の(北金)伊太山
が最高点である。十一工場の中山は二十点ほどの

差で敗れた。元工の伊藤担当が内蔵の販担当の感性を実する
ことを意した由、伊藤担当の間接にも弱ったもの也。

十二月三日(水)
是の事はおもて勇よへぬ事、勉強をひげます。

十二月四日(木)
晴。移軒が元工に入り妻が内窓に入った。梳櫳鶴が炭山に行くこととなつた。彼は工僕名を緩解川といひ頗る張り。女郎は尋ねてきたいとのこにから兄の高院のアドレスを教へてやつた。内窓の匠中の大根清を食事にもちよんと川久保地主の何とか云つたからそれで連中大に憤慨してゐる。大したことはないのにかく騒ぎ立てるのは平生舊体してゐる寧氣の発する所で、頗る生疏の原因か云々。
懸役どもの懸轡のハチ血を之として喧嘩にあり。而口色氏
へ争ひあつた。之を猪木氏へ投げし手記の板書題名、
猪のう上の依託、ぬぐい野向の名、備せにについての注意など
を記す。

十二月二十九日(金)
晴。妻て3来る。民子も子いづれも421く健強中りよし。~~機械屋の~~
~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~~~嫁娘の~~
二十年余暇役して佐々木即平が此地に安家する。今ヨリ始
へ行くこととなり。晴と別れ、玄関を玄門して由観場より出て行
た。かれは布料八地、~~毛織~~因なりしめ因故にて二十多年なりし
たり。折木の兄の許に行(由)。(昨年二月)、氣地の西まで

後し上手の男であった。純景の好きでやかで手に入れて、かくれておひとてゐた。犯則が二十一回あるべく来たに二級であつた。彼は五十九才で骨格よく壯健であったが、よく衣服類が近づくにつれ急にめでり衰弱に、(かの施へぬものしゆり意味になつて老けたのは不思議である)ほむかつた。七十歳もあら監獄は彼には暢氣な所であつたの如き老婆は何とか(無意味になつたのであらう)。彼は事に徳役をしようのない心かけを嘆仰してをつたが、独りもせつぱりこうであつた。昔と全く手足の目めがありとりふ。残生幸あれあれかし。

十二月九日(土)

晴。美しい風のない好天氣であつた。地島伊藤氏と小御室をなす。はん善人石川いわかいも小人場にてとつ無能なり。荒場の毛糸物をあれどよどもちかへてとり呼あり。今日より长大根、拂下(ほり)をなす。約二十キロで三十キロ。尺寸を成長よりで一寸ずつあるものもある。小豆刺繡而究焉増強業といふのを薦しての貯金相当に足せる。いつれ孫承氏に見せ。孫承氏は消防隊員而一破壊記といふを荒場の堂縁より十二人を連れて、搬入した。林扇を抱き石御座着用をよむ。大最も見るが在所ありじとよく研究して書いてある。龜井君より寄贈の東洋文化史大系ハ圓モ入り来る。近時作の被衣鑑し。

十二月十日(日)

晴。天気晴れ。敵海は角道鬼神。日本は陰り立つたらしく、A月にり端の對面包囲の最もなりタイ画すら、抗ひぬと無し怪勢を説げせられた。これに以て、通民地法、實智あり。

そのあとで、兩國連合うちアマ宣傳の禁及山脈より節電にて民房はと船による旨を演説す。東洋文化史大系第一巻の尾頭にも島吉氏の總説あり、前にPの論を贈ふとしめたる世界史は眼鏡を以て東洋より現実問題を論究す。忽にす氣を感ぜたり。

十四日(月)

赤せま卓有の大勅を勅發した。赤年とも互に日本を沈没してついに我れは世界の張心米英と競ふことないだ。果くも本日天皇陛下は宣教の詔勅を廢し給ふた。我が陸海空の精銳はマレー、比島、香港、布哇を脅威し多大の戦果を挙げつた。全國の實力者の一羣にあり、アジア十億の民衆のために本筋難を抜けて起つた祖國日本の姿の男々として神聖なる哉。我れ必しも因人たり。されども日本人として應分の助めを果さずんば可ひからず。

我れ何を為すべきか。

一、日本国民として恥かしからずて然る事にして終始す。~~アーヴィング~~死も恐るに足らず。

二、我れは因人たり。好き因人として他の模範ならむ。

三、東洋史の研究を一帯効玉む。

四、恩を前輩者に対する不祥が、臣官の如きモの始末とも何かに白取つて、首を伸べむ。

本題より東洋政策世界政策の経緯についての思考。
我帝の御火は我が魂を焼いて一切の妄念を断滅せんとする。我れ生れ更らむ。

軍人は如何に生活すべきか、
一、生産の増強に努力せし。
二、規律を嚴守し、大正協力し、利己主義を排斥し、皇民として終始せむ。
三、自説作用をりよ。妄すへからて人間に仲間の制限をりよ。
~~四、良物を貯蓄せ~~
四、空襲より人民を守る。軍事的訓練をりよ。

十二月九日(火)

晨、夕刻より雨となる。勝報頻々としている。遠くパナマ運河を危機するに至つては規模甚大なる戦。ハワイの攻陥は日あたり。珍珠湾方米軍大半海陸隊はすでに七割の戦闘力を喪失せり。マニラ島に上陸した敵は上陸は猛烈を極む。トヨツの電撃戦以上の作戦取れり。午あ十時、卯あにて百長が宣戰の祝勅を達成した。宣々国人の血を舐らせる深い決意を促された。やまくこの偉大な時代に生れたことを喜ぶ。民族の歴史のたり大なる犠牲を忍んで歴史に秉史。今日の日をたのしみ待つ女人を記してあり。

十二月十日(水)

雨。元工の常会でひらく。担当伊藤氏の外、会員十名。最初に会費として戦時受刑者の基準額は(1)生産者階層(2)故の空襲と被る(3)協力(4)規律遵守にむづむづを述べ。次に皆の意の盡心を以て賛成す。次いで元工内部の協力問題、御用車や機内障害の協力問題、生産増強の問題、工場美化の問題を論議す。東生個人と他の左様な多かりに人も多く、彼等は氣合とせりしかね、く尼受けられて。所詮も海外原木である。

常会に開いた。久留須島の隊長が比島沖下葉ガカ船に及川常会せを報す。十時より十九時、すすむ。水の出重い

十二月十一日(木)

晨。この夜体の具合悪し。糖尿病悪化せりとも云ひ。タロ又十七時、内院水の出やせよし。鹿児島西和男といへ百姓書く。武軍について感想を聞か。是軍の勝利を祈る旨記す。

十二月十二日(金)

所長職員へ井下を行ふ。

晨、今日腰一段を屠る。晨腰夫蘇地(スジ二人手を伸ばし)が頭を搔き頭へつけ余せ抜ぬき手をかき足を擦りたり。蘇地が中P¹なく頭のノド元をえぐりて斃す。血濁々として溢る。底この生血を掌に受けて口までにえにつけて飲む。山柄の血青白き悪党面目に加ゆかス²血の口(口につきしほ物像し。)山柄トリ蘇地と手が皮剥ぎ色Tでス³くと皮と脂身の肉を割いてゆく。腫瘍を割いて脂肪をつかみ出す。脊骨を鋸で切つてカヤキ下の穴によらず下げて~~おさへ~~10つに切~~り~~、²このから骨を去り、肉を~~おさへ~~ブツブツに切つて一人三百ヶ^ハとして二百余人の職員に拂下げた。多く人で、多く二時後半で掛つた。余も色々の肉を包袋にせんと~~おさへ~~10時頃から名あと書いてゐたところに教諭師、猪下氏の食事來りてヤア肉屋に来りました。十時、御用車に来りつひに我の腰を殺すに至る。思はおせん。此時おにありては未だ、日本通じ既死たるに拘せりと云ふ。此御用車等は敵討伐要所に行くなりと云ふ。夜、東京駅化丸太の第一尾張旅館。睡魔(さみ)に襲ひ。

十二月十三日(土)

晴。農場にて賄費献金の儀あり。当層は五円以下と捺定せり。農場四十三名中、半島人委員が一人の献金せず、に十二名にて百二十円の献金なり。半島人委員はも詮つてゐたか余が初めて献金させた。その他の民は祀意中、振き難いと見え。

十二月十四日(日)

晴。寝りしきりなし。

十二月十五日(月)

雨。やがて雲となり空さすとし。今手は天候不順なりしか近付に至りて平調に復せ感あり。二三年天候不順にして卓農免耕ト凶作ありしとは即ち來るといふ。そらに明年は凶作不避しとおもむれ。而も十二月号(禁錮記)指導思想)曉む。下らない説之の誤りに果る。對策半段卒は強果目を以し。告曉。比島マレー布哇の攻略遠からざるべし。

十二月十六日(火)

晴。よく晴れた美しい日である。この頃の農場はアソビで又は耗出して働いてゐる。要員は消防隊のヒトで、臺中に在つてゐる。彼は元ニ破壊消防隊の隊長である。しかしハ常識的に偏重して訓練せんとしてゐる。維持が出来るもの有り。

十二月十七日(水)

晴。朝、雲がたくさん下りてゐる。空くつきり晴れてゐる。け々社行隊の不気味の爆音を立てて来る。皇室本邦機械船に敵亦上陸を敢行したといふ報がある。南洋方面は遠からず我が勢力圏内に入り得らう。土人に対する政治的戦略をめ工作の全般を思ふ。国人代表となりたる伊藤が次郎中に活動し本隊をおけつたらしく。

十二月十八日(木)

晴。今日は山东菜及び佑葉を職員、地下鉄にて、余も應接として畠に赴く。山东菜は二十キロ、佑葉は十キロ地下鉄。一キロ僅かに二束である。内閣の紳士十名に元工より、輔外事官七名が手合て中止に至る。追駆より協力必要といつてか唱へられてそれが實際化しての意義があり、みな右方に縮狭に働いてゐた。午後二時、ハミズ少弾刑務所長に訪ねし中正の来所してその席に余に座らしめことかゝらずに面会した。ハミズ刑務所は監獄ある少年を集めておひかわることである。中正は併し所長として来たのである。夜、東京文化大司教セラフモドリヤー博士にて。

十二月十九日(金)

晴。二十一日の日曜の免業日を今日に繰り上げる。電力節約の關係からである。林海女海女海女海女。アメリカの軍艦史を講じ説明せられた。又先づ布哇攻撃の結果について詳報をきかせて貰った。一軍に残りたる太した戦果である。皆口宣せられ、ヨリ該軍艦くわからず、對ソソシテツの事例は

ソ聯邦の解体、このPAPのPAPへの退避、殖民地の独立、外債の償還等
への帰属、沿岸地、北極圏、山脈等の財産化等を認めた。

十二月二十日(土)

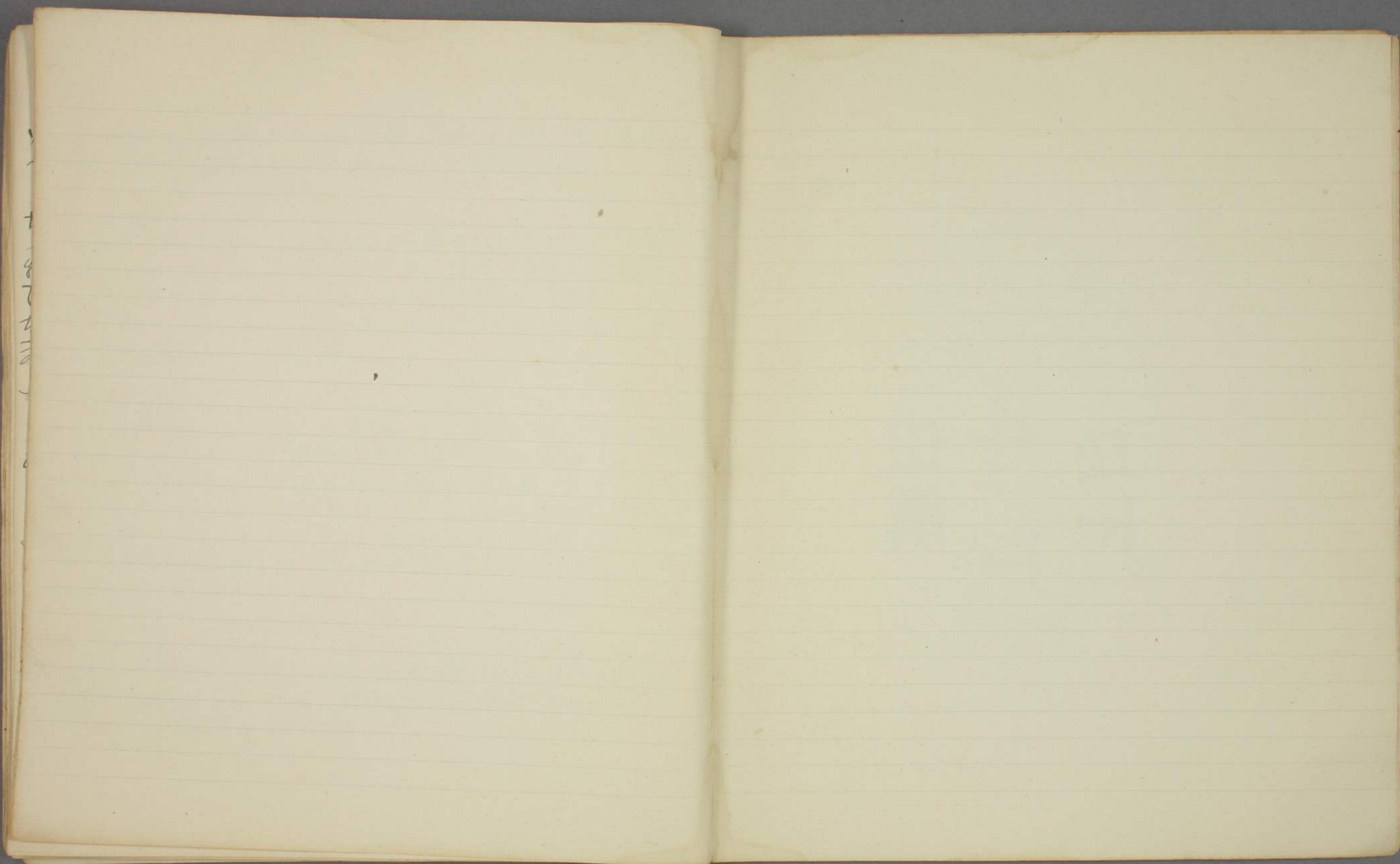
暑。室を涼しく保つことにした。洗濯をして、茹割りをして、お作
物の棚下は中で干す。外窓では豆芽の棚下をやっている。内窓
では先づ山东菜の追加をやっている。又葱の棚下をやっ
て、葱を増殖かかげ、後人のためのためみらいさせることをやる。葱
はまだある。夏はまだ続いた。

十二月二十一日(日)

暑。夕刻より雨が止む。西洋文化史大系原書 1ストラム話
の裏書きを読みはじめた。最初のマホメットの一巻を釣りこだりは
取はして、サセレント、空明時代を読み、更に読んで、オスマリイー
トルコの衰落よりケマルパルチのトルコ語を学んで、読み、中で
面白し。ヨーロッパのことは少し。我が身ではナショナルとして
描かれたのが印象的で、大帝國の興亡には一矢の胸説
的私ものとして考へておきたい。

十二月二十二日(月)

雨。午前中に晴れる。1ストラム話の裏書き終了。今は1ストラム
の解説 ~~を~~ 及びサセレント藝術の一概説を大む。それで
お1冊にして西洋史にあらず。



以下
4 丁
白紙

面食

七月 トモハラ, てぬぐい
八月 ハナ, 
九月 ハナ, ハラ
十月 ハナ, ハラ, 鹿足
十一月 ハラ, 朝霞笠, 中村経一
発行

七月 佐野大介, 佐々木, 西平男, 佐野探子, 中村経一, 東洋益造。
八月 勇士, 西平中東, 制足, ハラ, 中村経一, 沢田勝次,
九月 民子, 郡師, 小林社夫
十月 大介, 畠原, 郡師, 小林社夫, 中村経一, 2040万

末代

七月 トモハラ, 佐野ハラ, 東洋益造, 郡師, ハラ二区, ハラハラ, 古井義和
八月 探子六代主川伊惣左衛門, ハラハラ二回, ハラハラ一百五十五, 中村経一
中村又四代, 民子紙。
九月 郡師紙, ハラハラ, 子鹿。
十月 中村, 西平男, 佐々木, 郡師
十一月 中村経一, 東洋, ハラ, 子鹿, 民子, 小林社夫, 郡師。



"BOOKMAN SERIES"

46-204